
魔法少女リリカルなのはA's ~ 悪ヲ滅シ罪ヲ刈リ取ル者 ~

白き修羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA・S〜悪ヲ滅シ罪ヲ刈リ取ル者〜

【Nコード】

N9026U

【作者名】

白き修羅

【あらすじ】

六英雄の一人ハクメン。統制機構カグツチ屋上にて彼はユウキ・テルミとの戦いで瀕死の傷を負った……。そして彼は平行世界に飛ばされ、彼は一人の少女と出会う。彼はその少女との出会いで少しずつ変わっていく。「魔法少女リリカルなのは〜悪ヲ滅シ罪ヲ刈リ取ル者〜」始まります。

プロローグ（前書き）

この小説は、ブレイブルーCSのハクメンストーリーのバットエンドを迎えたところから始まります。駄文等ございますが見てください。つたらとても嬉しいです。

ブローグ

ブローグ

統制機構力グツチ屋上・釜

ズバア！！

「ぬうう！！！」

「ヒヤッハーハー！！！！どうしたハクメンちゃんよお！」

碧のオーラを纏った、逆立った緑の髪の男。ユウキィテルミが目の前に膝を着いている白い鎧に身を包んだ男、ハクメンを見下ろしている。

「一人で乗り込んできたところまではいいんだけどよお・・・」

テルミは右手にナイフを構え。

「やられちゃあダメだろうがよお！」

ザグー！！

「ぬおお！！！」

テルミの投げたナイフが、ハクメンの左胸に突き刺さる。

「ヒツヒツヒ！いいねえ、いい悲痛の声だ！おら！もつと鳴いてみせやがれ！」

再びナイフを投げるテルミ。

グザッ！

「があああ！！！」

右足、左肩にナイフが突き刺さり、悲痛の叫びを上げるハクメン。

「ギャーハハハハ！！・・・さてえ・・・そろそろ飽きてきたから・・・殺すわ」

テルミは碧色の三匹の蛟を形成する。

「おいハクメンちゃんよお、言い残すことあるかあ？俺は優しいからなあ、それだけは言わせてやるわ、ヒツヒツヒ！」

口元がニヤリと歪み、下卑た笑いをするテルミ。そしてハクメンは・・・

「下らぬ・・・殺すなら早く殺せ外道が・・・」

そう言うハクメン。その言葉は正に覚悟の言葉だった。

「ヒツヒ・・・じゃあ・・・死ねや」

蛟がハクメンに迫る。

「これも・・・運命か・・・」

そう呟くハクメン、蚊が当たる瞬間。薔薇の花弁を乗せた風が蚊を跳ね飛ばす。そしてハクメンの前に美しい金髪の少女。レイチエル。アルカードが居た。

「てめえ！クソ吸血鬼が！！」

「道化・・・」

「英雄さん此処は引くわよ」

レイチエルがそう言うと、ハクメンの背後にゲートが発生する。

「邪魔すんじゃないよ！！」

テルミ再び三匹の蚊を形成し、レイチエルに向かって攻撃する。

「っ！？」

二匹の蚊がレイチエルに激突し、少し揺らいだ表情をする。そしてもう一匹がハクメンに直撃し吹き飛ばされる。

「グウ！！」

「なっ！？」

吹き飛ばされたハクメンはゲートの中に入り、その瞬間ゲートが閉じた。

「ちっ！ハクメンを逃がしちゃったか・・・クソ吸血鬼！！毎回毎回俺の邪魔をしゃがって、うぜえんだよ！！」

レイチエルはテルミを発言を無視し再びゲートを作る。

「逃げんじゃねえよ！！クソが！！」

「さよなら・・・次会うときはもっと丁寧な言葉を使いなさい」

そう言いレイチエルはゲートをくぐる。

レイチエルがゲートで来た場所はハクメンが先程ゲートで転移したはずの場所のはずだが・・・

「いない・・・」

周りを見渡してもハクメンの姿は何処にも見えない。あれほどの傷を受けたのだから動けないはず。レイチエルはそう思い、滅多に見せない困惑した表情を見せる。レイチエル知らなかった。先程ゲートをくぐったハクメンは、レイチエルが予想だにしない場所に転移されたとは・・・。

プロローグ（後書き）

どうでしょうか？「ハクメン弱すぎるw」とか思っではいけません。少し駄文っぽかったですが・・・。基本この小説はハクメンメインで書いていきますので他のキャラが出ない・・・かもしれません。あと更新が遅いかもかもしれませんが。暖かい眼で見守ってやってください。

第一話（前書き）

先にこちらを更新しました。では第一話どうぞ。

第一話

第一話

八神家自宅

「はあ・・・」

深いため息を吐く一人の車椅子の少女。彼女の名は、八神はやて。彼女は足に原因不明の障害があり歩くことができない、そのため車椅子で生活をしている。今日は彼女が8歳になる誕生日だ。本来なら誕生日なら喜ぶはず・・・だが彼女は違った。何故なら

「なんで私には家族おらへんのやろ・・・」

そう彼女には両親がいない。彼女は幼い頃に両親を亡くし、「父の友人」を名乗る人物の庇護を受けながらずっと暮らしてきた。自分を祝ってくれる家族が居ない。彼女は誕生日が来るたびにそう思う。

「あかななネガティブなこと考えるのやめよ・・・」

彼女はベランダに向かうために車椅子の車輪を動かす。

「けどやっぱ一人は寂しいな・・・」

そう呟く、そしてその時彼女の目の前の空間が歪みだした。

「な、なんや!？」

歪んだ空間が徐々に収まりだすとそこには雪のような真っ白い髪の毛が倒れていた。はやては恐る恐るその男に近づく。

「・・・!？この人怪我しとる!!」

その男は所々にまるでナイフで刺され、切り裂かれたような傷がついていた。彼女は慌てふためき、電話に向かう。

「石田先生!人が!人が倒れとる!!私の家です!早く来たって!」

彼女は必死にそう言う。電話が終わると彼女はすぐさま男に近づく。そして彼女は男の手を握る。

「大丈夫ですか!？今お医者さん呼んだから!」

彼女はそう言い握る手を強くする。

それから数分後

「はやてちゃん!」

海鳴大学病院の女医、石田幸恵。彼女ははやての主治医であり、彼女が信頼する数少ない人間である。

「石田先生！この人や！」

「酷い傷！はやてちゃん！この人を病院に連れて行くわよ！」

「お願いします！」

幸恵はすぐに男を病院に搬送する準備をする。

「もう少しや！もう少しで助かるからな！」

彼女はそう呼びかけるが、男はその呼びかけに応じることはない。搬送する準備が終わり、幸恵達は病院に向かった。

「む・・・う・・・」

彼はふと眼が覚める。見知らぬ天井、此処は何処かの部屋だというのは判る。棚に薬品が並び、ベッドの周りに白いカーテンがある。何処かの病室だろう。だが彼はそんな事を考えてるのではない。先程までテルミとの戦い、そしてレイチェルの介入により、テルミの攻撃を受け、レイチェルの用意したゲートに飛ばされた・・・。そこまでは覚えている。彼は体を起こし、周りを見渡す。だが普通ならいるはずのレイチェルが居ない。彼は困惑する。そして窓を見る

「ここは・・・カグツチではないな・・・」

窓に広がる風景は彼が知っている風景とは違った。家々が立ち並び、美しい空が広がっている。まずカグツチでは見られない風景だ。それに彼は気づいた。

「魔素が・・・感じられない・・・」

魔素とは第一次魔道大戦において黒き獣が放出した物質で、生態系の変化させたり寿命を縮めたりしてしまう物質だ。だがそれが感じられない。そんなことは有得ない。だが彼は一つの結論にたどり着くことで理解した。

「別の・・・平行世界というものか・・・」

彼はそう呟く。レイチエルの用意したゲートが何かしらの障害が生じ、別の世界とつながり、転移した。そう結論した。そして彼は自分の体を見る。

「！？こ、これは・・・！？」

彼は驚愕する。身体の傷が手当されている。だが彼が驚愕しているのはそんなことでは無い。それは彼の体が何時も身に纏っている鎧の姿ではなかったからだ。

「これは・・・どういうことだ・・・」

するとガチャリと扉が開く。そこには車椅子の少女が居た。

「あ！ようやく眼覚ましたんやな！」

車椅子の少女が彼に近づいてくる。

「心配したんよ、何回も呼びかけても起きんし」

少女は笑みを浮かべてそう言う。

「少女よ、身を映すものはないか？」

「身を映す？・・・ああ鏡のことやね？ちょっと待ってな・・・はどうぞ」

はやては一瞬困惑した表情をしたが、直ぐに鏡を用意した。そして鏡を手に取り、顔を映す彼は再び驚愕した。そこに映っていたのは髪と目の色は違えど彼がまだ人間であつた時の姿。ジン「キサラギの顔だつた。」

「え〜と大丈夫？」

少女が彼の顔を覗き込んでそう言う。

「・・・問題ない」

「そつかならええんや、あ、私八神はやてっていいですよしゅうな」

ニコツと笑いながらそう言うはやて。

「名乗られたからには名乗り返さなければ・・・私の名は・・・」

「あ、起きたのね！」

白衣を着た女性が扉の所に立っていた。そして彼に歩み寄る。

「手当てをしたのはお前か？」

「そうよ、どう？ 身体の具合は？」

「問題ない」

「そ、ならいいんだけどね。私は石田幸恵。この子の主治医よ。しかし驚いたわ、はやてちゃんの家にあなたが倒れているって連絡受けたときは」

「・・・・・・・・」

彼は黙り込む。

「あゝそれなんやけどな先生、チンピラに絡まれてた私をこの人が助けてくれてな、その後家まで送ってくれたんだけど怪我してて倒れて・・・・・・・・」

はやてはそう言い彼の方を向き「話を合わせて」とアイコンタクトをする。

「そうだったの？」

幸恵は彼の方を向く。

「・・・・・・・・ああ」

「そう・・・ありがとう、はやてちゃんを助けてくれて・・・」

「いや・・・気にすることはない・・・」

彼はゆつくりとベットから降りる。

「動いて大丈夫なの!？」

「問題はない・・・手当てをしてもらってすまなかつたな」

彼はそう言い、部屋を出ようとする。

「ちよっ!?!どこに行くの!？」

「此処から出るのだが？」

「あなた家は？」

「家・・・私にはそのような所などはない」

「えっ」

彼のその言葉で言葉を詰まらせる幸恵。そして続けて

「じゃあ・・・家族は？」

「・・・昔家族と呼べる者はいたが・・・今は居ない」

部屋が静まりかえる。

「じゃあ家にこうへんか？」

「？」

はやてのその一言に彼は振り向く。

「助けてもらった御礼もしたいし・・・ダメ・・・？」

「・・・・・・・・」

彼は黙り込んでしまう。そして数秒後

「いいだろう」

彼はそう言った。どうせ行くところも、帰る所もない。ならばこの少女の提案も受け入れるのもいいだろう・・・。彼はそう心の中で言った。はやてはとても喜んだ表情をし

「決まりやな！ほな行こう！」

はやては車椅子をの車輪を回し部屋を出た。

「・・・・・・・・」

「クスッ」

「何を笑っている？」

彼がそう問いかけると幸恵は

「あの子があんなはしゃぐ姿初めてだから」

「そう・・・なのか？」

「ええ」

「何しとるのー！はよ行こう！」

部屋の外からはやての声が聞こえる。彼は「フッ」と言い部屋を出た。部屋に残ったのは幸恵だけだった。

「不思議な人だったわね・・・あ、名前聞くの忘れた・・・」

幸恵は今更気づいた。

はやてと彼は八神家自宅に着き、居間にいる。

「・・・何故あのような嘘をついた？」

彼ははやてにそう問いかける。

「だって、ベランダに居たら突然出てきました、なんて言えないやん」

「・・・・・・・・」

確かにそうか……。と彼は思う。

「そついえばお兄さんの名前きいてなかったなあ」

はやては思い出したようにそう言う。

「私の名は・・・ハクメン」

「はく、めん？」

頭に？を浮かばせるはやて。

「なんや変わった名前やなあ」

「・・・はやてよ、第一次魔道大戦、黒き獣、第十三階層都市カグツチ、ラグナ・ザ・ブラッドエッジ、この単語に聞き覚えはあるか？」

「うゝんなんかのゲームの単語かな？ごめん知らんわ」

はやてのその言葉でハクメンのここは別世界という結論が当たった。

「はやて、率直に言うが・・・私はこの世界の人間ではない」

「えっ？それ本当？」

「ああ・・・」

そしてハクメンははやてに自分の居た世界の事を話した。はやてはそれをキラキラとした表情で聞いていた。

「すごいな〜ハクメンさんのいたところまでゲームの世界のようやな〜それでそれで！もっと聞かせて〜な」

「良いだろう」

再びハクメンの話が始まる。彼は次に第一次魔道大戦の事を話した。それをだまって聞いているはやて。

「ほえ〜ハクメンさんって英雄さんなんや〜」

「そう呼ばれていた・・・」

そして彼は次にこの世界に来る経緯を話した。はやては先程より暗い表情になった。

「これが私がこの世界に来た経緯だ・・・」

「ハクメンさんにそんなことがあつたんなって・・・」

はやては静かにそう呟く。

「ハクメンさんは元の世界に帰りたいん？」

はやてがそう問いかけてきたがハクメンは

「いや・・・今の私があちらに戻ったとしても何もできないだろう・・・」

ハクメンは自分の手を見てそう言った。今の身体は人間そのもの。

こんな身体で戻っても瞬殺されてしまうだろう。

「そっか・・・ハクメンさんは家族おらへんやったな、私もそうなんや、小さい時に死んでもうて・・・」

「そうなのか・・・」

はやては暫し言葉を止め

「あのハクメンさん・・・こんなこと言うのはなんやと思うけど・・・私の家族になってくれへんか？」

はやてはそう言うのと直ぐにハッとなり

「やつは何でもない・・・わす」 「いいぞ」 「えっ！」

「いいぞと言っている」

「ほんまか！？ほんとにほんとにほんまか！？」

「くどい、いいと言っている」

今のハクメンをレイチエル達が見たらなんと言うか・・・容易に想像できる。なぜハクメンがはやての申し出を受けたかというと、放っておけなかったからだ。はやては笑顔を見せるが時々とても悲しそうなる表情をする。まだ幼い彼女がそんな表情になるのは、恐らくはやてには家族が居ないからだろう。ハクメンは第一次魔道大戦で両親を亡くした子供を多く見た。だが彼女はその子供達よりも悲しい表情をしている。ハクメンはそんな彼女を放っておけなかったのだ。

「~~~~!!」

はやては眼に涙を溜めている。

「どうしたはやて？」

「嬉しいんや・・・家族ができたって思うとつい涙が・・・」

「・・・・・・・・」

ハクメンは静かにはやての頭を撫でる。

「あっ」

「辛かったのだな・・・」

「う、うう・・・うわああん!!」

はやては大きな声を上げて泣いた。ハクメンは黙って泣きじゃくるはやての頭を撫でていた。
そして数分後

「落ち着いたか？」

「うん、ハクメンさんがずっと撫でてくれたおかげで大分よくな
ったわ」

「・・・そうか・・・はやて」

「なんや？」

「私に名前を付けてはくれないか？」

「えっ？なんでや？」

「此処に居る私はハクメンという男だった、だが今の私はその名を使う資格はない。だからはやて、私に新しい名を付けてくれ」

彼のその言葉に頭を悩ませるはやて。

「うゝん名かぁゝ・・・ハクト、うんハクトや」

「ハクト・・・どういう意味だ？」

「白い人やからハクトや」

「フツ・・・随分と安直な名だが・・・気に入った、今日から私は八神ハクトと名乗ることにしよう」

「えっ！？八神って・・・」

「私ははやての家族なのだろう？なら性も同じでなければ可笑しいだろう？」

「それもそうやね・・・じゃ今日からよろしゅうなハク兄」

「ハク兄？」

彼は不思議そうな表情をする。

「せや、ハク兄は今日から私のお兄さんってことやからハク兄や」
はやてが満面の笑みでそう言う。

新しき人生を迎えるハクメン改め、八神ハクト。彼はこの先どのような人生を送っていくのか……。それはマスターユニット「アマテラス」でさえ知らないことだった。

第一話（後書き）

どうでしたか？まさかのハクメン名前変更。今のハクメン見た目は、白い髪で、赤い眼のジンって所です。第一話にしてはやや強引と思いましたが。ですが案外頑張りました。今のハクメンの力などの設定は次の話で欠きます。感想等待着っています。

第二話（前書き）

どうも白き修羅です。最近更新が不定期です、何とかして直したいです。では第二話どうぞ。

第二話

第二話

ハクトがこの世界に移した日の夜。

「　　」

鼻歌を歌いながらキッチンで料理を作っているはやて。

「……………」

料理が出来上がるのを静かに待っているハクト。そして料理ができたらしく、テーブルの上に料理が並べられいく。

「腕によりをかけて作ったんよ！ささつ、食べてえな」

笑顔ではやてが言う。

「（料理か…永らく口にしていなかったな…）」

ハクトはそう思い、料理を口にする。

「どうや…？口に合わなかった？」

心配そうに聞いてくるはやて。するとハクトは

「うまい…」

そう一言だけ呟いた。はやては心配そうな表情からペアと笑顔になり

「よかったわぁ…口に合うようで…」

「……」

ハクトは何も言わずモクモクと料理を食べ続けた。そして料理全て食べ終わり、はやてが食器を洗っていると

「私も手伝おう」

「ええよ、ハク兄は休んでてな」

「む…だが」

ハクトが何か言おうとするとはやてが

「大丈夫や、これぐらいの事はいつも一人でやってた事やし…」

はやてがそう言うとはクトが目を瞑りながら

「確かに今までは一人でやっていたかもしれないが…今は一人ではないだろう？それに…兄の心遣いは素直に受けておくべきだぞ？」

ハクトのその一言で驚いた表情をするはやて。だが直ぐに笑顔になり

「じゃゝ手伝ってもらってええかな？」

「心得た」

ハクトがはやての横に立つ。

「ありがとうな…ハク兄…」

ハクトに聞こえない声で呟く。そしてハクトが手伝った事により、食器が早く洗い終わった。そして風呂の入る用意ができたので、はやてが居間にいるハクトのどこに来た。

「ハク兄、お風呂の準備できたよ」

「うむ…風呂か…」

するとはやてが頬を赤らめもじもじして

「あの…ハク兄…一緒にお風呂入ってほしいんやけど…」

「……」

「ダメ…？」

上目遣いでそう言うはやて。

「背中を洗う程度ならいいだろう」

その一言ではやて満面の笑みになる。

そして風呂場

「はやて…痒いところは無いか？」

「もうちょつと右のとこや」

今ハクトは、はやての髪を洗っているところだった。その様子は他から見れば、仲のよい兄妹そのものだった。はやての髪が洗い終わり

「次は私がハク兄の背中流してあげるわ」

「む…では頼もうか」

ハクトはそう言い背中を見せる。

「ハク兄の背中ひろいなあ」

必死に背中を洗うはやて。

「そうか…？」

「そうや…っと、これでよしや」

どうやら洗い終わったらしい。

「すまないな、はやて」

「ええって、兄の背中を流すのも妹のつとめやし」

その一言にハクトはフツと笑った。

風呂から上がり、ベランダで夜風を浴びているハクト

「ハク兄ここにいたんやな」

はやてがアイスを持ってハクトの横に来た。

「ハク兄も食べる？」

「うむ・・・いただこう」

ハクトははやてからアイスとスプーンを受け取り、蓋を開けスプーンですくい、口にする。

「お風呂の後のアイスは格別やな」

「・・・・・・・・」

「ハク兄、どないしたん？」

はやてが顔をのぞきこみ言う。

「私はこの世界に来たばかりだが・・・この世界に来て良かったと思っている・・・」

「えっ？」

ハクトのその言葉で頭に？を浮かべるはやて。

「私は今までずっと戦ってきた、何時まで続くかわからない戦いを・・・、そして私の戦いはこの世界に来たことによって終わった。心半ばでこの世界に来た、だから初めは元の世界に戻りたいと思った。だが今は違う、今はこの世界に居たい心の奥で思っている・・・何故かは知らないがな・・・」

「ハク兄・・・」

「すまないな、はやて・・・この話は忘れてくれ・・・」

ハクトはそう言いスプーンを動かす。そしてアイスを食べ終え

「はやて、もうそろそろ床につきたいのだが部屋を案内してもらえないか？」

「え、う、うんこつちやで」

はやてはハクトがこれから過ごす部屋へと案内した。

「この部屋や」

「すまないな・・・」

ハクトがベットに近づくとはやてが

「ハク兄おやすみなさい」

ハクト振り向き

「ああおやすみ、はやて」

ハクトがそう言い返すとはやてが扉を閉める。

「・・・おやすみ・・・か」

そう呟き、ハクトはベットに身体を寝かす。テルミとの戦いの疲労が残っていたのか、ハクトは直ぐに眠りについた。

ハクトがこの世界に来てから数日が経った。そしてハクトは様々なことが判った。この世界は機械技術が発展しているのだと。最初、車を見てとても驚いていた。その様子を見てはやては腹を押さえて笑っていた。そして自分の内にある筈のスサノオユニットだ。どうやらスサノオユニットは全く起動していない。恐らくあのゲートを通ってこの世界に来たとき、スサノオユニットが何かしらの影響を受けて、停止した。と結論付けていた。その何かしら、というのは全く判らないが・・・。そして今、ハクトとはやては街に出てショッピングをしている。因みにハクトの服装は、白いパーカーに黒いジーンズだ。ハクトがこの世界に来た次の日にはやてに買ってもらった。店の人は驚いていた、ここまで白い服が似合う人はいないと。

「ハク兄、行きたいところがあるんやけどええかな？」

「私は構わないぞ」

「よっしゃ！ほな行くで」

はやての案内でとある店についた。

「翠・・・屋？」

「そやゝほな入るで」

ハクトとはやては店に入ると

「いらっしゃいませ」

元気な声な眼鏡をかけた女性店員がハクト達の元に来た。

「お二人様ですか？」

「ああ」

「ではこちらです」

店員に案内され空いていた席に着き、メニューを見るハクト

「ご注文が決まったら教えてくださいね」

「ああ」

「ハク兄、ここの店のシュークリーム絶品らしいで」

「ほう・・・ではそれを頼む」

「私も」

「かしこまりました」

店員はそう言い、奥の方へ行った。

「はやてが絶品と言うシュークリーム・・・興味があるな・・・」

「フッフ、楽しみにするがええでえゝま、私も楽しみやけど」

ハクト達が会話をしていると、店員がシュークリームを持ってくる。

「どうぞ」

シュークリームがテーブルに置かれる。先にはやてが食べる。

「うまあゝゝ今まで食べたシュークリームの中で一番やわあゝ」

はやてがシュークリームを頬張りながらそう言う。

「ほう・・・では私も・・・」

シュークリームを口に運ぶハクト。

「・・・ほう、なかなか美味だな」

ハクトがそう言うとはやてが笑いながら。

「おおお！ハク兄が私の料理以外を褒めた！珍しいな」

「あなた達って兄妹なの？」

店員の質問にハクトがいち早く答えた。

「そうだ」

「けど全く似てないような・・・」

「む・・・」

「私とハク兄は義理の兄妹なんよ」

「へえーそうなんだあー、私も妹がいるんだけど・・・そろそろ店の手伝いに来るはずよ、あ、自己紹介が忘れてたわ、私、高町美由希っていうの、よろしくね」

「ハ神はやていいいます、よろしゅうな」

「・・・ハ神ハクトだ」

その瞬間、店のドアが開き、茶髪の少女が入ってきた。

「あ、来た来た、ちよつとこっち来てー」

美由希がその少女を手招きする。

「なあに？お姉ちゃん」

「この子が私の妹よ」

「あのゝ何歳や？」

はやてが少女に質問をする。

「8才だよ」

「わあゝ同年やなゝ、私八神はやていうんや、よろしゅう」

「はやてちゃんだね、うん覚えた！、えゝと、そっちの人は？」

少女はハクトの方を向く。

「・・・私は八神ハクト、はやての兄だ、よろしく頼む・・・」

「はやてちゃんのお兄さん？かつこいい人だね」

「そやろゝ私の自慢のお兄ちゃんやからな」

「あ、私自己紹介してなかった」

そしてこの瞬間が

「私は高町なのはっていいます！よろしくね！」

白き侍と将来の管理局の白い悪魔の出会いだった。

第二話（後書き）

白い悪魔との邂逅ですwこの小説のハクメンなんか優しすぎる気が・
・。

文才力がさらに欲しいです。ところで疑問ですが・・・スサノオユ
ニツと、

斬魔・鳴神ってロストギアに入りますかね？。感想お待ちしています。
す。近いうちに、もう一つの小説も更新いたします。

第三話（前書き）

どうも、白き修羅です。暑いですね、暑いと色々大変です。クーラ
ー効いてる部屋での執筆・・・いいですねえ、今回少し短いですが・
・三話でござ。

第三話

第三話

翠屋にて。

「ハクトさんって不思議な人ですね」

「？」

美由希がハクトにそう言う。だがハクトは、何が不思議なのかわからない表情をする。

「なんていうのかな…どこか怖そうだけど、どこか優しくそうな雰囲気」
「？」

美由紀の言葉に「クスッ」とはやては笑う。

「ハク兄は凄く優しい人やで、怖い夢見た時一緒に寝てくれたし、私が寝るまでずっと頭撫でてくれたし」

「へえ」と感心するように声を上げる美由希。そしてなのはは、誰にも聞こえないくらいの小さい声で

「いいなあ・・・」

そう呟く。だがハクトはその呟きをしっかりと聞いていた。そして

ハクトはなのはの頭に手を置く。

「ふえ？」

ハクトは何も言わず、なのはの頭を撫でる。

「ふにゃ．．．」

夢心地のような表情をする。ハクトは「フッ」と笑う。

「．．．！？ハクトさん何を！？」

なのはは、ハツと我に返ってハクトから若干離れる。

「してほしかったのだろ？」

「ふえ？」

「美由希、なのはをもつと甘えさせてやれ．．．なのははまだまだ甘え盛りだ、妹を甘えさせるのも姉の務めだぞ？」

ハクトの言葉に少し驚いた表情をする美由希だが

「フッフッそうね．．．」

と言う。そしてなのははハクトに近づき

「あの．．．ハクトさん．．．また頭撫でてくれませんか？」

「ふむ．．．いいだろう」

再びハクトは、なのはの頭を撫でる。

「にゃ〜・・・・」

またなのはは夢心地な表情になる。ハクトの撫では不思議な力がこもっているかもしれない……。すると、ハクト達の近くに、一人の女性が近づいて来た。

「あら、なのはが知らない人に懐いているわね」

「あ、お母さん」

なのはが言う。ハクトは撫でるのをやめ、その女性の方を向く。

「なのはの母親？」

「ええ、私は高町桃子、え〜とあなたは？」

「私は八神ハクトという。そしてこっちが私の妹の」

「八神はやてです」

少し不機嫌そうに言うはやて。ハクトは何故はやてが不機嫌なのかわからなかった。

「はやてちゃんとハクト君ね、よろしくね」

ニコツと笑う桃子。

「（二児の母親にしては随分と若い気がするな・・・）」

ハクトはここの中で呟く。

「そういえば、恭也は？」

桃子が美由希に問う。

「一時間したら来るって」

「恭也？」

「今ここには居ないけど、私の息子よ」

「（む、三児の母親だったか・・・三児の母親でこの見た目・・・人間わからないものだな・・・）」

つくづく思うハクトであった。

「うん・・・」

桃子が急に、ハクトの顔をまじまじと見る。

「・・・何だ？私の顔に何か付いているか？」

すると桃子が

「ねえハクト君、ここで働かない？」

「む？」

桃子の突然の申し受けに困惑の表情をするハクト。

「ハクト君、なかなかカッコいいから女性客が集まると思うんだけど・・・給料はこれ位出すわよ」

桃子はメモを取り出し、幾つかの数字を書いてハクトに渡す。

「む・・・こんなに出して構わないのか？」

「どれどれ」

はやてはハクトの持つメモを覗き見る。そこには7桁の数字が並んでおり、はやても驚く。

「うは！こんなにもらえるか！？・・・ハク兄働いたらええやん」

「・・・はやてがそう言うなら・・・やっても構わない」

「本当！？」

「ああ」

ハクトの言葉に桃子は喜ぶ。

「よかったわ、男性店員全く居なかったからこれで解決ね！」

「働くといっても具体的に何をすればいい？」

ハクトは桃子に問いかける。

「ウェイターの仕事をやってもらいたいわ」

「・・・ああ」

「じゃ早速明日から来て頂戴」

「承知した。さてはやてそろそろ帰るぞ」

「えっ？もうそんな時間か・・・じゃ美由希、桃子さん、なのはちやんまたな」

ハクトははやての車椅子を押す。

「ハクトさん！また明日！」

なのはが元気な声で言う。

「ああ、また明日な」

ハクトはなのはにそう言い、ハクトとはやては翠屋を後にした。

そして帰り道。

「しかし、勢いでああは言ったが・・・私に接客業など勤まるだろうか・・・」

ハクトの呟きに、はやてが答える。

「大丈夫やて、ハク兄なら絶対できるって、私が保証するで！」

「・・・ありがとうはやて。はやてがそう言うことできそうな気がするな」

「えへへ・・・」

こうして見ると、はやてとハクトは本当に仲の良い兄妹である。

「そういえばはやて、なのはを撫でている時機嫌が悪そうだったが・・・何故だ？」

ハクトの問いに、はやてが少し言葉を詰まらせるが

「だって・・・ハク兄は私のお兄ちゃんや・・・自分のお兄ちゃんが他の子にあんな事してたら・・・」

ハクトは直ぐに気づいた、はやてはヤキモチをやいているのだと。

「・・・はやて、今日は一緒に寝るか？」

「えっ？ええの！？」

「ああ」

「やった！ハク兄、早く帰ろ！今日はハク兄の好きなシチューやで！」

「フツ、はやてのシチューは絶品だからな、楽しみだ」

ハクトは微笑み、車椅子を押していく。

彼ははやてが悲しむ事、苦しむ事をとても嫌う。ハクトは初めてはやてと会ったあの日から、はやての心の支えになると決めた。そして我がたった一人の大切な妹を、再び笑う事を思い出させてくれたはやてを、我が全てを懸けて守ることを心に誓った。そして・・・彼は一年後、再び剣を握る事になる。

「我は空^{くう}、我は鋼^{こう}、我は刃^{じん}！我は一振りの剣にて、一人の『少女』を守り・・・『悪』を滅する！！我が名はハクメン・・・推して参る！！」

彼は再び戦いに身を投じる。それは・・・一人の少女、八神はやてを守る為、その刃を持って悪を滅する為、数々の困難との邂逅が始まる・・・

第三話（後書き）

どうでしたか！？ハクトまさかの翠屋で働くことにwジンの顔って普通にイケメンですよ？まあそんな事はどうでもいいですが、次回、ハクト、ハクメンに復活します！！お楽しみに！！感想ドシドシまっています！（）ゼエア！！

第四話（前書き）

ども、白き修羅です。遂にハクメン復活です！

第四話

第四話

ハクトがはやての兄になり、一年が経った。ハクトが翠屋の仕事を始めた途端、桃子の狙い通り、女性客の割合が激増した。ハクトは接客を臨機応変に対応し、全く文句の付けどころがない評判ウェイターとなった。ハクト曰わく「接客業など向いてないと思ったが…意外に楽しいかもしれない…」と口にしていた。

ここ最近変な声が頭の中に聞こえると、はやてにハクトが言ったのだが、はやても変な声が聞こえたらしい。2人とも気にはしていたが、いつしか声が聞こえなくなったので、大したことではないでした。

そして病院にて、今はやての足の診察中である。

「あまり進展がないわね・・・」

幸恵が呟く。はやての足は一向に回復する兆しを見せない。

「副作用が出ないようだったら、少しだけ薬の量増やす?」

幸恵の問いに

「・・・お願いしますわ」

はやてはそう答える。

「……………」

ハクトは腕を組み、無言で立ち尽くしていた。

はやての診察が終わり、病院を後にしたハクトとはやて。

「私の足、治らへんのかな…」

はやては、弱気な声で言う。

「大丈夫だ…絶対に治る」

ハクトは車椅子を押すのをやめ、はやての頭を撫でる。

「…ありがとな、ハク兄。ネガティブにいくのやめよ!」

はやては元気な声で言う。

「ードン！」

「「!?!」」

突然地面が揺れる。

「地震かな?」

「…！？はやて！？」

バゴォ！

突然はやての目の前に、木のような物が突き出てきた。ハクトははやてを抱きかかえる。

「ハ、ハク兄！？」

そしてハクトはその場を直ぐに離れた。

「此処なら安全だろう…」

ハクトはそう言い、後ろを振り向く。木が街の至る所に生えている。異形な空間が其処にあった。

「何なんやあれ…」

はやてが思わず声を漏らす。

「…はやて、少し待っていてくれ」

ハクトは、はやてをその場にあったベンチに下ろす。

「ハク兄！どこに行くんや！？」

「はやての車椅子を持って来る。彼処に有るはずだからな」

「ダメや！あそこは絶対に危険や！」

声を荒げるはやて。ハクトは、はやてと同じ目線にしゃがむ。

「大丈夫だはやて。絶対に戻って来る。私を信じる」

ハクトの真っ直ぐな瞳にはやては黙って見る。少しの沈黙があったが

「…わかった、絶対、絶対戻ってきてな！」

「ああ」

ハクトは微笑み言う。そして街へ向かった。

見渡す限り、木、木、木である。まさにその場は異界と化していた。

「一体何が原因だ・・・？」

ハクトは周りを見渡しながらかく。

ドゴオ！

「グウ！？」

突然、ハクトは何かお腹に当たる感覚がした。そこにあつたのは腕の太さ程の木の枝だった。そしてハクトはその木に体を飛ばされる。

「チッ！」

ハクトは何とか着地をする。だが腹部のダメージはかなりのものだったのか、片膝をついている。

「このままではまずいか…」

木は再びハクトに襲いかかる。ハクトはそれをかわす。

ドゴー！

「があ！？」

かわした後に、地面から木の枝が生え、ハクトを背後を襲い、ハクトは吹き飛ばされ、地面に落ちる。

「ぐ…うう！」

地面に倒れ、苦しげな声を上げるハクト。ハクトはふと思ふ。もしこの木の異形がこのまま広がっていけばどうなるか？間違いなくこの先にいるはやてに危害が及ぶ。そんな事は絶対にあつてはならない。ハクトはゆっくりと起き上がる。そして瞼を閉じ

「我が内に眠りし、三輝神、スサノオユニットよ！一人の少女を…
・はやてを守るために…・私に力を貸せ！！」

その刹那、ハクトは白き輝きに包まれる。

「スサノオユニットよ、我が呼び声に応じたか…・今一度、私は剣^{つるぎ}を握る！おおおおおお！！！！！！」

ハクトは吼える。そして輝きは一層強まる。・・・そして輝きが収まると、そこに居たのは、白を基調とした鎧、両肩、両足など、いたるところに赤い眼のようなものがついており、背中には身の丈程の刀を携え、そして何より目を引くのは何も描かれていない、真っ白な仮面を被っており、その素顔を窺い知ることはできない。そう、・・・その姿こそ、彼の本当の姿。

「ふむ・・・やはりあの時と同じく、二割程度か・・・だが問題ではない」

彼は刀を抜刀し、正眼に構える。そして

「我は空、我は鋼、我は刃！我は一振りの剣にて・・・」

彼は『罪』を刈り取ることは止めた。そしてこれからは一つの事を心に誓う。

「・・・一人の『少女』を守り・・・『悪』を滅する！！我が名はハクメン・・・推して参る！！」

六英雄が一人、白き英雄『ハクメン』がここに復活した。

「うつ・・・」

一人の少女、高町なのはが、街に広がる木々の中枢部に居た。なのはの格好は、白い学校の制服に似た服を纏っており、杖のようなものを持っている。ダメージでも負ったのか、苦しい表情をしてい

る。

「なのは！大丈夫！？」

なのはの足元で、イタチに似た生き物が、なのはに心配そうに声をかける。

「う、うん、大丈夫だよユーノ君・・・」

「けど・・・」

すると、なのはの体より大きな木の枝が、なのはに襲い掛かる。なのはそれを避けようと思ったが、足が動かない。そして木の枝は、なのはに直撃しようとしていた。

「うっ！」

「なのは！！！」

「ズバァ！！」

一迅の白き風が、枝を切り裂く。

「えっ？」

なのはは、何が起ったかわからないようだ。自分に当たるはずだった木の枝が、自分の足元に落ちている。そして目の前には、白い鎧に身を包めている男。ハクメンが立っている。

「（何故高町なのはが此処に居る・・・？それに足元に居る、イタ

チ、ただのイタチではないな・・・」

「あ、あなたは一体？」

ユーノがハクメンにそう尋ねるが

「イタチよ「フェレットです！」む、ではフェレットよ・・・あれは滅してもよいのか？」

ハクトはそう言い、刀でおおい茂る木の葉の中に青く輝く光を指す。彼はあれがこの異形の原因だと感じた。

「え？えつと・・・いいですよ？」

何故、疑問系なのか聞きたいが、今はそれどころじゃない。彼は刀を横に構える。

「ゆくぞ・・・！」

彼は駆ける。木の枝がハクメンを襲うが

「鬼蹴・・・！」

姿勢を低くしてそれをかわし、高速で踏み込み

「閻魔！！」

踏み込み後に身体をバネとした鋭いアッパーを放つ。すると木の枝は易々と粉々になる。

「すごい!!」

ユーノが声を上げる。そしてハクメンは青く輝く光りに近づき

「ぜいあ!!」

――斬!!

鋭い斬撃を放つ。すると、青い輝きが収まり、巨大化した木々が徐々に小さくなり、最後には普通の大きさの木が其処にあった。

「・・・存外もろかったな」

「・・・・・・・・」

なのはは、啞然とした表情をする。ハクメンは刀を納刀し、無言でその場を立ち去ろうとする。

「待ってください!!」

不意に、なのはに呼び止められたので、ハクトは歩みを止める。

「助けていただいてありがとうございます! えっと・・・名前を教えてもらっていいでしょうか?」

「そんなことより、いいのか白き少女よ? 警察とやらが此方に向かっているぞ?」

なのはは、耳を澄ますと、救急車やらパトカーのサイレン音が聞き取れた。

「にゃー！ど、どうしよう！」

「フッ、さらばだ・・・」

彼は一瞬でその場を離れ去った。

「誰だったんだろう・・・」

「そんなことよりなのは！ジュエルシード回収して早くここから離れよう！」

「あっ！そうだったの！！」

あたふたしているなのは。ユーノは「ハア・・・」とため息をつく。

「ハク兄・・・遅いな・・・それに木がなくなってしまったし・・・」

はやてがベンチに座り、ハクトが来るのをを待つ。すると

「はやて」

ハクトの声が聞こえたので、そちらを向く。

「ハク兄！！」

ハクトが車椅子を押し、はやての前に来る。

「すまないはやて、少し遅くなった」

そしてはやてを抱きかかえ、車椅子に座らせようとするが、はやてはぎゅっとハクトを掴んで離さない。

「はやて？」

「・・・心配したんや」

その声は涙声だった。

「ハク兄、戻ってくるの遅いし、何かあったんかと思ったんよ・・・ハク兄が居なくなったら・・・また私一人になるやんか・・・」

「・・・そうか、すまなかった、心配かけたな・・・」

そう言い、はやてを車椅子に座らせる。

「ハク兄、私の前から居なくならないって、約束してくれへんか？」

はやてがそう言うが、ハクトは既に答えは決まっていた。

「ああ、約束しようははやて。私ははやての前から居なくならない。ずっと一緒だ・・・」

ハクトははやての頭を撫でながら言う。はやては笑顔になり。

「ありがとう、ハク兄」

「フツ・・・さて早く帰ろう」

「うん！」

ハクトは車椅子を押す。

彼は力を取り戻した。それははやてのに降りかかる脅威を、全て打ち払うため、彼は戦う。そして、影で暗躍する者が、ハクトに牙をかけようとしていた・・・。

第四話（後書き）

どうでしたか？正直、ハクメンの戦闘がこれでいいか心配です。やはりハクメンは二割の方がしっくり来るので、二割のままです。あと、ハクトははやてにメツチャ弱いですw

感想お待ちしております！！

第五話（前書き）

ども、白き修羅です。今回はあの者達との邂逅です。どうぞ

第五話

第五話

「この男か・・・」

一人の老人、時空管理局提督。ギル・グレアムは、とある部屋でモニターを眺めていた。そのモニターに映っていたのは、雪のように白い髪に、血のように赤い瞳をした男。八神ハクトだ。彼の隣に二人の女性が立っていた。だがその二人は、猫のような耳と尻尾が生えている。

「お父様、この男は？」

髪の短い女性、ギル・グレアムの使い魔、リーゼロッテが問いかける。

「この男は八神ハクト。一年前に、闇の書の娘の元で暮らしている男だ」

「父様どうなさいますか？」

次は髪の長い女性、同じく彼の使い魔、リーゼアリアが問いかける。

「…悪い芽は早めに取り除いた方がいいな」

八神はやてにはずっと一人で居てもらわなければならない。忌まわしきロストロギア『闇の書』を封印するために。ずっと一人で、誰

とも関わりなく暮らしてもらわなければ、十年以上かけてきた計画が水の泡になってしまふ。今回しかチャンスはないのだ。あの闇の書ごと八神はやてを封印するチャンスは。

「わかりました、あの男を排除してまいります」

リーゼロッテとリーゼアリアは姿を消した。ギル・グレアムは椅子にもたれかかる。

「我が計画の為に…」

ギル・グレアムはそう呟く。その時の彼の表情は、どこか哀しげだというのは誰も知らない…

翠屋にて、ハクトは現在仕事中である。

「ハクトくん」

「どうしました？」

ハクトは桃子に敬語で言う。ハクトは客達の目の前では、上司である桃子に敬語で話している。

「今日はもう上がってもいいわよ」

「わかりました」

彼は帰る支度をした。

「あれ？ハクトさん帰っちゃうの？」

なのはがハクトにそう聞く。

「ああ…それではな」

「うん、また明日ね」

ニコツと笑うのは。そしてハクトは翠屋を出た。

家への帰り道、彼は幾つかの事を考えていた。まず先日眼を覚ましたスサノオユニットだ。どうやら自分の意志であの姿ハクメンになれるようだ。あの姿のままだったら生活が出来ない…、彼としては都合がいい。そしてあの木の異形について、あれを倒した後、元の大きさに戻った。そしてその傍らに青い宝石のような物が落ちているのを確認できた。恐らく、あの宝石が木を異形した。と彼は考えた。ここ最近、この街に不穏な気配を感じるようになった。あの宝石はまだ至る所にあるのだろう。

「あの宝石もそうだが…気になるのは、高町なのはだな…」

そう、なのはの事も気になる。何故あの場になのはが居たのだろうか？そしてあの妙な姿に、あの杖、あの杖はこの世界の、事象兵器の部類にあたる物だろう…。

「…あの杖、トリニティの物に似ていた気がするが…」

そんなことはどうでもいい。と呟くハクト。彼女が彼処に居たのは、あの宝石を回収しにきたのだろう。そして自分はたまたま其処に居合わせた。あの宝石は一体何か？後で聞いてみるのもいいだろう。と彼は考えた。

そしてハクトは自宅に到着した。

「今戻ったぞ」

そう言い、ハクトは居間に入る。

「お帰り、ハク兄ちゃんどうだええところに来たわ」

「？」

「醤油切れてもうて、仕事帰りに疲れてるところ申し訳へんけど・・・買ってきくれへん？」

「ああ、承知した・・・」

ハクトはそう言い、家を出た。

近くのスーパーで醤油を買ったハクト。休憩がてらに公園のベンチで腰を下ろして、ビンの牛乳を飲んでいる。

「ふむ・・・この世界の牛乳は中々に美味だな・・・む？」

ハクトは周りの異変に気づき、立ち上がる。今は3時だ。この時間帯に公園に人が一人も居ないなどという事は有得ない。ましてやこの活気のある海鳴市ではもっと有得ない。

「人の気配が感じられない・・・それに・・・結界か？」

するとハクトの眼前に、仮面を付けた二人の男が突如として姿を現した。

「（転移魔法か！？）」

「八神ハクトだな？」

右側に居る、仮面の男がハクトに問う。

「・・・いかにも」

ギューン！

「！？」

ハクトの体に、光りの輪のような物、バンドがハクトを拘束する。

「グッ！なんだ此れは！？」

ハクトはそれをとこうとしたが

「無駄だ、それは破壊できない・・・」

左側の男がハクトに言い聞かせるように言う。

「貴様等・・・一体何が目的だ!？」

ハクトは声を荒げて言う。

「目的?、それは・・・お前を殺すことだ」

その言葉にハクトは少し眉が動く。

「殺す? 私をか？」

「ああ」

「・・・ククク」

ハクトは静かに笑む。

「何がおかしい？」

その問いにハクトは答える。

「自らの技量を知らぬ者が、身の程を知れ!! スサノオユニット、解放!!」

その瞬間ハクトの姿が変わり、白き侍、ハクメンの姿になった。

「はああ!!」

バキーン!!

「「なっ!?!」」

ハクトは、バインドを腕力だけで引きちぎる。仮面の男は驚愕の声を上げる。そしてハクメンは刀を抜き、構える。

「殺すと言ったのだ・・・其れなりの覚悟は出来ているのだろうか・・・」

ゾクッ!!

仮面の男は殺気を感じた。

・・・ヤバイ・・・コイツ絶対にヤバイ・・・殺される!!

二人はそう感じた。それは『倒す』というレベルの殺気ではなく、まさに『殺す』という殺気がハクメンの体から感じ取れる。ここまですべて強烈な殺気を感じたのは二人にとって初めてだ。気づけば足が震えていた。

「如何した？足が震えているぞ？」

「くっ・・・」

カッ カッ カッ

ハクメンは右側の男に近づく。男は恐怖のあまり、身動きすら取れず、呼吸もまともに出来ない。そして

「ゼエア!!!」

ズバァ!!

「ああああ!!!!!!」

「ちっ・・・浅かったか・・・」

男を袈裟に切り裂いた。左側の男がすぐさまもう一人の男を抱え、ハクメンから距離をとる。すると二人の姿が変わる、二人の女性、リーゼロッテとリーゼアリアがそこに居た。今ハクメンが切ったのはリーゼアリアだったようだ。

「ほう・・・猫か・・・」

ハクメンは二人の容姿を見て呟く。

「大丈夫!? 今傷を・・・」

リーゼロッテは、リーゼアリアの傷に手をあてる・・・が

「!?! 傷が回復しない!?!」

「そ、んな・・・」

リーゼロッテはハクメンに視線を送り

「アリアに一体何をした!?!」

リーゼロッテは声を荒げ問う。

「フツ・・・我が剣、斬魔・鳴神は切り裂いた部分の時を止める・・・如何なる回復術を施しても癒える事はない・・・だが浅かったな、自然治癒位は出来るだろう・・・」

彼の持つ武器、アークエネミー斬魔・鳴神は、あの驚異的な回復力オオカミを有する『蒼の魔道書』を持った、ラグナザブラットエッジを切り裂いた時も傷が癒えることがなかった。

「と、時を切る・・・！？そんな・・・まるでロストログア級の・・・」

「しかし猫か・・・ククク、私は何かと猫と縁えにしが有るようだ・・・」

彼はそう呟き、鳴神を構える。

「さあ・・・冥府の王が呼んでいるぞ・・・！」

ハクメンは二人に近づく。だが

「・・・気が変わった、直ぐに私の目の前から消える」

「えっ？」

二人は、呆気にとられた表情をする。もし彼がここで二人を殺したとしよう。そうすればはやてと共に居られない。人殺しの自分はやての側に居て言い訳がない。彼はそう思い、二人を殺す気がなくなったのだ。

「次に私の前に姿を現してみよ、その時は・・・」

ジャキ！！

「ひっ！」

リーゼロッテの首に鳴神をあて

「二体の骸が並ぶと思え！！」

二人は慌てて姿を消した。そして彼はスサノオを解除する。

「フン・・・何者かは知らんが・・・まあいい・・・む」

彼は買った筈の醤油を探す。すると醤油ビンは足元で割れていた。

「・・・買い直さなければならんな」

彼はそう呟き、再びスーパーで醤油を買い帰宅した。その後はやてに「遅い！」と怒られたのは別の話である。

「ヒッグ・・・お父様あ・・・」

椅子に座るギル・グレアムに涙声で声を掛けるリーゼロッテ。

「アリアは大丈夫だよ、傷の処置はしたからね。それにすまない口ツテ、私のせいで二人には怖い思いをさせた・・・」

「お父様あ・・・」

ギル・グレアムは思う。あの男がもしあのまま気が変わらずにいたら・・・間違いなく二人を失ってただろう。あの男をどうにかしないと、自分の計画が実行できない。彼は、泣き続けるリーゼロッテを撫でながら考えていた・・・

第五話（後書き）

第五話でした。牛乳を飲むハクト・・・なんかシュールw少しプラチナネタを出しましたwあとロツテ達が惨敗しました。ファンの皆様方申し訳ありません。次回は展開を早くします。感想お待ちしております！！

第六話（前書き）

白き修羅です、こんばんわ。今回はある者とハクトを接触させます。今後のための布石です。ハクトはジュエルシード事件に少ししか関与しません。今回は短めですが、どうぞ

第六話

第六話

「お待たせしました、翠屋特性シュークリームです」

テーブルにシュークリームを丁寧に置くハクト。

「では、ごゆっくり・・・」

一礼して、店の奥に行く。女性客は奥に歩いていくハクトをずっと見ていた。その様子を見て桃子は思う。

「（うわぁ〜皆ハクト君に釘付けね〜）」

「桃子、如何した？」

「いえ、何でもないわ」

「そうか・・・」と小さな声で呟くハクト。彼は女性達から熱烈な視線を送られているのは、全く知らない。というか気づいていないのだった。

翠屋の仕事が終わり、牛乳ビン片手に帰宅最中のハクト。

「・・・うむ、やはり雪〇の牛乳は美味だ・・・」

と呟く。彼は仕事帰りに雪〇の牛乳を飲むことが日課になっていた。彼は牛乳を一本飲み終わり、二本目に手をつけようとした瞬間

「っ!？」

異様な気配が感じられた。それはあの木の異形が現れた時と同じだ。すると背後から

ダダダダダ!!

巨大な黒い猪が、ハクト目掛けて走って来た。

「くっ!!」

ハクトは横に飛びかわす。猪はそのまま走り抜けていった。

「あれもあの石の異形か・・・む!？」

彼は驚愕した。先程手を付けようとした二本目の牛乳ビンが、猪の足跡つきで地面に落ちて割れていた。

「・・・・・・・・」

パリン!

彼は飲み干した牛乳のビンを握り割る。

「化け猪めが!!スサノオユニット、解放!!」

彼はスサノオを起動し、猪の後を追いかけていった。幸いにも誰にも見られていなかった。

「・・・フッ！」

猪の突撃を軽々とかわす、金髪の両方で結び、黒いマントをはためかせている少女。

「早いけど・・・動きが直線的すぎる・・・」

フェイト・テストロッサが呟く。余裕な様に言うが、彼女は肩で息をしている。

「けど・・・攻撃が全然通用しない・・・」

すると

ドコォ！

猪の横から、オレンジ色の髪的女性が殴りつける。

「これでどうだい！！」

フェイトの使い魔、アルフが言う。だが猪は何事もなかったように起き上がる。

「くっ！なんてタフな奴なんだい！！」

アルフは叫ぶ。

「（このままじゃ、私達が不利になる・・・どうすれば・・・!?）
」

フェイトは気づいた。誰かが自分の張った結界の中に入ってきた。

「一体誰が・・・」

彼女がそう呟いた瞬間、彼女の横を白い何かが通り過ぎる。ハクメ
ンだ。

「火蚩^{ほたる}!!」

バキィ!

空中で身体を横に倒し、真上に向かっての回し蹴りを放つ。すると
猪の巨体は空中に浮かび上がる。そしてハクメンは更に空中の猪に
近づき

「椿祈^{ちはね}!!」

ズバァ!!

身体を横に捻って1回転させ、その勢いそのまま鳴神を振り下ろし切
り裂く。猪は勢いよく地面に激突する。そして彼は地面に着地し

「まだ終わらぬ!!ゼエァァ!!」

ズドン！！

彼は鳴神を縦一閃に切り裂く。

「……………」

フェイトとアルフはその様子を、口をポカンと開け見ていた。猪の巨体は姿を消し、その場には普通サイズの猪と、青い宝石が落ちていた。彼はその宝石を拾う。

「…………これがやはり元凶だったか」

彼は呟く。

「あ、あの！」

フェイトに声を掛けられ、其方を向くハクメン。

「それを…………渡してもらえませんか？」

その言葉に一瞬迷うハクメンだが

「…………良いだろう」

フェイトに向かって宝石を投げる。フェイトはそれを危なげなくキャッチする。ふと考えたらハクメンは、あの石を自分が持っていても仕方がない、なら欲している者に渡すのもいいだろう。と彼は考えた。

「黒き少女よ…………何故集めているか聞かぬが…………其れは危険な

なにゆえ

物だぞ・・・」

「・・・はい、ジュエルシードは危険な物だとわかっていますが・・・
けど、集めなきゃいけないから・・・」

「ジュエルシード？その石の名称か？」

「は、はい・・・」

フェイトはそう呟く。

「其れは貴公等が回収しているのだな、なら早めにこの街からその
石を回収してくれ。其れはこの街に有って良い物じゃない・・・」

「わ、わかりました・・・」

「任せた・・・でわ、さらばだ」

彼は踵を回し、フェイトに背を向ける。

「あ、あの！名前、教えてください！」

彼は立ち止まり

「我が名は、ハクメン・・・」

「ハクメン・・・さん」

彼は再び歩み始めた。フェイトの隣にアルフが並ぶ。

「・・・何者だろうね、アイツ」

「わからない・・・けど」

フェイトは一息置き

「きっといい人だよ」

フェイトはそう言う。アルフは「そうかな」仮面つけて怪しいよ」と言っていた。フェイトの頬が赤くなっていたのは誰も気づかなかった。

帰宅路のハクトは、牛乳を再び買って、満足そうな顔をしていた。はやてが「ハク兄牛乳好きやな」と口にしていた。

第六話（後書き）

フエイトと接触させました・・・やらかした。ハクト牛乳の怒り。食べ物の恨みは恐ろしい、といったところです。火蛸と椿祈の連続技。ハクメンコンボで基本ですねwとところで何故牛乳かといいますが、助けて！ココノエ博士！でココノエがカルシウムもつと取れと、言っていたので、牛乳を飲ませましたw感想お待ちしています！！！！

第七話（前書き）

今晚です。白き修羅です。今回は飛んで、あいつらが登場します。
PS 事件はごり押しで終了させましたが・・・ではどうぞ

第七話

第七話

ハクトがフェイトと出会ってから数日後。海鳴市に不穏な気配は全て消えた。フェイトかなのはがジュエルシードを全て回収したのだろ。これでこの街の脅威はなくなった。ハクトはそう思い、胸をなで下ろした。

「むう・・・何を買いえばいいか・・・」

海鳴市のとある宝石店で一人、一際目立つ白い髪の男。八神ハクトがショーケースの中を腕組みしながら見ている。彼は今日の翠屋の仕事を早めに終わらせた。理由は明日、はやての誕生日だからだ。はやては女性だから、誕生日プレゼントはペンダントを買おうと、この宝石店にやって来た。だがいざ買おうとしたが、何を買いえばいいか全く判らない。彼此考えて二時間が経った。そんなハクトを見かねたのか、一人の店員がハクトに近づく。

「何かお探でしょうか？」

「うむ、プレゼントにペンダントを買おうと思っているのだが・・・」

正直何が良いのかわからなくなてな・・・」

「彼女さんにプレゼントですか？」

店員のその言葉に少し困った表情になるハクト。

「違う、彼女にではない・・・妹にだ」

「妹さんですか、そうですね・・・少々お待ちください」

店員がそう言うと、ショーケースの中から一つのペンダントを取り出す。それはハートの形で、無色透明でとても美しい宝石が埋め込まれていた。

「ほう、金剛石か」

「お客様なかなか古風なお方ですね」

それは褒め言葉か？と思うハクト。

「しかし何故金剛石なのだ？」

「知りませんか？ダイヤモンドには、ある石言葉があるのですよ」

「石言葉？」

「はい、ダイヤモンドの石言葉は・・・」

――永遠の絆なんですよ

永遠の絆・・・ハクトはその言葉を聞き、決断した。

「それを買おう・・・」

「かしこまりました、〇〇万円になります」

ハクトは財布を見る。「よし足りる」と呟き、金を出す。

「ありがとうございます」

そのペンダントを、綺麗に包装紙に包んでもらい、店を出る。

「・・・良い買い物をしたな」

そう呟き、家に直行した。

「戻ったぞ」

「ハク兄お帰り」

ハクトは居間のソファに座る。

「今日もお疲れや。あ、ハク兄牛乳飲む？」

「いただく」

はやては、ソファアに座っているハクトに牛乳を渡す。

「にしてもハク兄牛乳ごっつ好きやな、やっぱ白やからか？」

「・・・白ければいいものではないぞ」

ハクトの言葉に、はやては苦笑する。

「今日の夜は何だ？」

「今日は鍋やで！」

「うむ・・・？昨日もではなかったか？」

「はて？何の事やる？」

はやては口笛を吹きながら知らん顔をし、キッチンへと向かった。

そしていつも通り、晩御飯を食べ、はやてとハクトは一緒に風呂に入った。そして居間でハクトは珍しく、はやてと格闘ゲームを一緒にやっている。はやては青い服に、稲妻を纏っている剣を持つキャラを使用し、ハクトは赤い服に、炎を使うキャラを使用している。

「ガンフ○イム！！」

ドーン！

「ちよっ！ハク兄！そこでガンフ○イム！？」

「ドラ○ン・イン○トオオル！！」

ボコーン！

「あー！！ハ、ハク兄の圧勝やないか…」

はやてはグテーとうな垂れ、コントローラーを手放す。

「ハク兄ホント初心者なんか？」

「ああ・・・このゲームをやったのは初めてだ」

「それなのになんでそんな強いんや・・・？」

「・・・センスか？」

「ほお」と言い、半目になりハクトを睨むはやて。

「けど負けへんで！さっきまでのキャラは使い手じゃあらへんからな！次から本気出すで！」

「ククク・・・良いだろう・・・」

はやては「よっしゃーやったるで！」と大きな声で言い、コントローラーを再度握る。

そして一時間後

「ナパアー○・デス!!」

チュドーン

「・・・な、なんやて〜〜!!」

あっけなく全敗してしまったはやて。

「真っ白に燃え尽きたわ・・・ははは・・・」

はやては空笑いする。

「ふむ・・・このゲームは中々に面白いな・・・しかし・・・この人物は誰かに似ているような・・・」

ハクトは手を顎にそえ考える。

「ハク兄そのキャラ使うの禁止や!!」

ビシィとはやては、ハクトに指を指す。

「はやて・・・もう11時だぞ?」

「あ、もうそんな時間なんや・・・ほな寝よか」

「はやて、少し待ってくれ」

はやてが自室に行こうとするが、ハクトはそれを止める。

「何や？ハク兄」

「少し早いが・・・」

ハクトはポケットから、綺麗な包装紙に包まれた物を出す。

「はやて、誕生日プレゼントだ」

そう言い、はやてに手渡す。はやては驚きの色を隠せない。

「は、ハク兄・・・覚えとったんか？」

「勿論だ。妹の誕生日を忘れる兄が居るか？」

「ハク兄・・・なあハク兄、開けてもええ？」

「ああ」

はやては、包装紙を取っていく。そして綺麗なペンダントが姿を現す。はやてはそのペンダントを手取る。

「綺麗・・・これって本物のダイヤモンド？」

「うむ・・・」

「け、けどこれ高かったんじゃ・・・」

「フツ・・・」

ハクトははやてに近づき、頭を優しく撫でる。

「お前の為だ、値など如何でもいい。私ははやてに喜んで欲しくて買ってきたのだ。はやてが値なんて気にすることはない・・・」

「ハク兄・・・」

「ところで・・・気に入ってくれたか？」

ハクトの問いに、はやては即答する。

「うん！ずっと、ずっと大切にする！！」

「喜んでもらえるようで良かった・・・」

「あの、ハク兄？」

「？何だ？」

「これ付けてくれへん？」

「ああ」

ハクトははやての首に、ペンダントのチェーンを回す。

「ど、どうかな？」

「・・・似合っているぞ、はやて」

「ありがとハク兄。あ、ちょっとかがんでくれんか？」

「わかった」

はやての前で、ハクトはしゃがむ。

「もうちょっとコツチ来て」

「うむ・・・」

ハクトは更に近づく。そして

チュッ

はやては、ハクトの頬にキスをした。

「!？」

頬を赤く染め、ハクトの頬から離れるはやて。

「えへへ・・・ありがとこのキスや」

はやては小悪魔的な笑みを見せる。

「む・・・」

突然の事で少しハクトは動揺したが、直ぐに気を取り直し

「そういえば、はやて知っているか？その宝石には石言葉と呼ばれるものがあるのだぞ」

「石言葉？教えて教えて！」

はやては興味心身になって問う。

「その宝石の石言葉は・・・永遠の絆だ」

その言葉に驚くはやて。

「・・・永遠の絆か！私達にピッタリやん」

満面の笑みになって言う。

「フツ、確かにな・・・」

ハクトも僅かだが笑みを浮かべる。

はやてはあの後自分の寝室へ来た。ハクトからプレゼントされたペンダントを手に取り見つめる。初めて自分の家族から貰ったプレゼント。そう考えると、はやては頬を赤らめ自然に笑みがこぼれる。

「ありがとな・・・ハク兄、大好きや・・・」

そう呟く。その瞬間、光がはやての視界に入った。

「ん？なんや眩しいな…」

其方の方を向くと、そこにははやてが何時も大事にしている、鎖に縛られている本が異様な紫色の光を放っていた。

「な、なんや…」

思わず声を漏らす。そして部屋がグラツと揺れ動く。その本は光を放ちながら、静かに浮かぶ。美しい金の装飾が施されている表表紙が、まるで生き物のように脈打つ。

（封印解除します）

無機質な音声が、はやての頭の中に響く。本ははやての下に降りてきた。はやてはそれから離れようと後退る。

（Anfang）

その瞬間、はやての胸の辺りから光輝く玉のような物が現れた。はやては驚きのあまり声をだせない。そして玉は本の中に吸い込まれるように入っていた。すると本は激しい光を放つ。

「ひゃあっ！」

思わずはやては目を瞑る。徐々に光りが収まっていくのがわかる。はやては恐る恐る目を開けるはやて。

そこにはいつの間にか、紫色に光る魔法陣の前に四人の男女が跪いていた。はやてはポカーンと口をあけていた。

「闇の書の起動を確認しました・・・」

先頭で跪いているピンク色のポニーテールの女性がそう言い

「我ら『闇の書』の収集を行い、主を守る守護騎士にてございます」

その女性の後ろに居る、金髪の女性が続けてそう言う。

「夜天の主の元に集いし雲…」

続けて、犬か、狼の耳を持つ浅黒い肌をした大柄な男性が静かに言う。そして最後に、赤い髪をおさげにした、幼い少女が

「『ヴォルケンリッター』何なりと命令を…」

そう言う。はやては突然の事の連続で、遂に

「きゅう・・・」

ボタンと倒れた。

5分前

「・・・ありがとう、ハク兄・・・か」

ハクトはソファーに深く腰を掛け、誰もいない居間で呟く。

「私も・・・変わったものだ・・・」

彼がこの世界に来てちょうど一年が経とうとしていた。彼にとってはやては掛替えのない人物だ。自分に笑う事を思い出させてくれた、そして自分を実の兄として接してくれる。

「初めてか・・・誰か一人をここまで護ろうと考えるなんて・・・これからずっと・・・はやてを護っていこう・・・」

と瞼を閉じて呟いた。するとはやての部屋から突然、異質な気配が感じられた。

「はやての部屋か!？」

ハクトははやての部屋に向かう。

はやての部屋の前に来たハクト。何やらはやての声ではない者の声が聞こえた。ハクトは迷わず扉を開ける。

「はやて!！」

扉を開けると四人の人物、ヴォルケンリッターがはやての前に居る事が、ハクトは確認できた。そんなことは如何でもいいとハクトは心の中で言い聞かせ、はやての方を見る。

「貴様何者だ!！」

ピンク色の髪の女性が立ち上がり、警戒心を露にする。だがハクトはそれを無視し、はやてに近づく。

「なっ！？貴様！！」

ハクトは、はやてを抱きかかえ

「はやて！！しっかりしろ！！はやて！！」

はやての体を揺する。だが一向に目を覚まさない。ピンク髪の女性は更に声を荒げ

「質問に答えろ！！貴様は何者だ！！」

「むう・・・この時間だと幸恵は起きているか・・・だが行くしかないか！！」

女性の言葉は、如何やらハクトの耳に入っていないようだ。ハクトは、はやてを抱きかかえたまま立ち上がるが、ピンク髪の女性がいつの間にか剣を手に持ち、ハクトの眼前に向ける。

「貴様・・・私をおちよくっているのか？」

「退け・・・」

「何？」

ハクトは殺気を込めて

「退けと言っているのが判らぬか！！邪魔だ！！」

「ぐっ！！（な、なんだこの異様な殺気は！？こいつ只者ではない！？）」

ハクトの殺気に、思わずたじろぐ。ハクトはその隙に、部屋を出た。

「！？追うぞ！！」

ハクトの後をヴォルケンリッター達が追う。他の者が見たらその光景は珍妙だった事は・・・どうでもいいことだが・・・。

第七話（後書き）

・・・・ごり押しでしたね・・・・ようやくヴォルケンス登場！そしてハクトのスルースキル発動wハクトとヴォルケンス達のからみにご期待を！！まだ感想を書いたことのない人も、感想待っています！

第八話（前書き）

こんばんは、白き修羅です。紅き修羅の方が全然進んでないので、少ししたらそちらを進めたいと思います。

第八話

第八話

はやてを病院に連れてきた後：

「こんな夜中に急に来たんだもの、本当に心配したわ。ハクト君だつてすごく心配そうな顔してたのよ」

「心配かけてほんとすんません・・・」

はやては幸恵に頭をペコペコと下げて言う。ハクトはその様子を、腕を組み、壁に寄りかかりながら見ていた。

「・・・む？」

ハクトは視線を感じた。それはあの四人、ヴォルケンリッターからだった。彼女達は数人の男の看護士にぐるりと囲まれている。ハクトが少し睨むと、ピンク髪の女性は警戒した表情で見、金髪の女性はビクッ！としてオロオロしだし、赤髪の少女は一瞬だけ視線をずらし、獣耳の男はじつとハクトを視線に捕らえている。

「（・・・私を警戒しているのか？）」

「はやてちゃん・・・あの人達は誰なの？」

幸恵はヴォルケンリッターに指を指して、はやてに問いかける。

「え〜と・・・」

「ハクト君はあの人達の事知ってるの？」

「知らん」

「即答!？」

幸恵は啞然とした表情をする。

「こんな寒いのに何か変な格好してるし、言ってる事は訳分かんないし・・・ハクト君も知らないようだし・・・」

腕を組み悩む幸恵。

「（どないしょ・・・本の中から出てきた、なんて言える訳ないし・・・）」

考えるはやて。すると突然はやての頭の中に、女性の声が聞こえてきた。

（御命令を頂ければ、お力になれますが・・・）

と聞こえてきて、びっくりするはやて。キョロキョロ周りを見渡すが、誰が話しかけているか判らない。声からするにピンク色の髪の女性のような。

（これは思念通話です。心で御命令を念じて頂ければ、御命令が私に伝わります）

そうはやては言われるが、突然の事の連続だったので、未だに頭が混乱している。だがはやては何とか気を取り直し

（え〜と、ほんなら命令ー、と言いかお願いや、ちよつと、私に話合わせてな？）

ピンク髪の女性にそう念じた。

（はい・・・）

はやては幸恵の方を向き

「え〜と・・・石田先生、実はあの人達、私らの親戚で・・・」

「親戚!？」

驚いた表情をする幸恵。ハクトは僅かだが表情が曇る。

「実はこの人たちわざわざ私の誕生日を祝いに、海外からやってきてくれた親戚なんです。それでサプライズに私をビックリさせようとしてくれて、わざわざ仮装までしてくれて・・・でも私それを見てびっくりして気絶しちゃったんです。な皆」

はやてはヴォルケンリッターの方を向きそう言った。

「そ、その通りです・・・」

ピンク髪の女性がそう言うが、幸恵はまだ疑いのまなざしを向けている。

「・・・本当？ハクト君だって知らないって言ってたわよ？」

急に話を振られて多少焦るハクト。はやては、「話を合わせて」と何時ぞやのような表情をする。ハクトはため息を吐き

「（仕方ない・・・一芝居打つか）

ヴォルケンリッターに近づき、手を顎に沿え見る。

「・・・む？言われてみれば、なんだお前等だったか。・・・幸恵安心しろ、この者達は確かにはやての親戚だ・・・仮装しているから気づかなかったがな・・・」

ハクトの言葉に看護師達の疑いの目が緩くなる。

「ハクト君が言うなら・・・」

幸恵はそう呟く。はやては引きつった笑みを浮かべて誤魔化している。だがハクトはヴォルケンリッターを睨み続けていた。

そしてはやて達は逃げるように帰宅した。今はやての部屋に皆が居る。

「そっかぁ・・・この子が闇の書っていうもんなんやね？」

「はい」

隣で片膝をついているヴォルケンリッター達の説明を聞くと、闇の書と呼ばれる魔導書を手にする。

「物心ついた時には棚に在ったんよ。綺麗な本やから大事にはしてたんやけど・・・」

と呟くはやて。ハクトは壁に寄りかかりながら思った。

「（闇の書・・・この世界の魔導書か・・・蒼の魔導書^{アレ}に比べて危険性は少なそうだな・・・）」

ハクトはそう思い、はやての手元にある闇の書に視線を向ける。

「そや皆の名前を教えてくれへん？」

はやてがそう言うと、ピンク髪の女性から

「剣の騎士、シグナム」

赤髪の少女が

「鉄槌の騎士、ヴィータ」

金髪の女性が

「湖の騎士、シャル」

獣耳の男性が

「盾の守護獣、ザフィーラ」

それぞれそう言う。

「シグナムに、ヴィータ、シャマルにザフィーラやね。うんいい名前や」

はやては笑顔で言う。

「ところで主・・・その白髪の男は一体何者でしょうか？とても常人とは思えない殺気を放っておりましたが・・・主の従者ですか？」

ピンク髪の女性がはやてに問う。はやては怒った表情になり

「ハク兄は従者あらへん！私のお兄ちゃんや！！」

はやてがそう怒鳴ると、シグナム達は顔を青ざめ、ハクトの方を向き

「主の兄上とは知らず数々の無礼申し訳ありません！！主を護る使命がある故、命は差し出せませんが、どのような罰でもこの私が！！」

シグナムはとても心底申し訳ないとなさそうにそう言う。ハクトはシグナムに近づき、そしてシグナムと同じ目線にしゃがみ、シグナムに手を伸ばす。

「ハク兄！」

「ッ！！」

頬を殴られると思ったのだろう、シグナムは唇をキュッと噛む。だがシグナムのその考えは見事に裏切った。

ポンッ

「えっ？」

ハクトはシグナムの肩に、優しく手を置く。シグナムは呆気にとられた。

「顔を上げよ、烈火の将シグナム。貴公は守護騎士として当然の事をしたまでだ。私も貴公の立場なら同じ事をしていただろう・・・だから気に病む必要はない」

ハクトはシグナムにそう言う。だがシグナムは

「で、ですがそれでは私の気がすみません！主の兄上に剣を向けるなど・・・許されることでは有りません！」

ハクトはその言葉に

「・・・良い、私は許す。それとも私を困らせたいのか？」

「う・・・わ、わかりました」

渋々了承するシグナム。するとはやてが何かをゴソゴソ探していた。

「あ！あった、あった」

はやてはメジャーを取り出し、シグナム達の前に車椅子で移動し

「わかったことが一つある。闇の書の主として、皆の衣食住の面倒をきつちりと面倒見なあかんということや。幸い住むところはあるし、料理は得意や。明日みんなの服買ってくるから、サイズ測らせてな？」

目を丸くしてぽかーんとするシグナム達。ハクトはそんなシグナム達を見て苦笑しながら

「つまり・・・お前等は今日から、家族。ということだな」

はやての方を向きそう言う。

「そや！」

「そうか・・・家族が増えるのは喜ばしい事だな・・・」

その二人のやり取りを見て

「（・・・この二人はとても仲が良いのだな・・・）」

シグナムはそう感じた。彼女達は初めてなのだ『家族』と呼ばれるのが。自然と心が温かくなっていくのがわかる。それは彼女だけではない。グイータ達も同じ気持ちになっていたのだ。ハクトは、そんなシグナム達の様子を見逃さなかった。

「（これから・・・賑やかになりそうだな・・・）」

ハクトは心の中でそう呟いた。

第八話（後書き）

ふう・・・あ、ため息ついてすみません！。ハクトは昔と違ってかなり性格が丸くなっています。牛乳の影響ですかねwいやいや、はやての影響ですね。次回にもご期待を。感想バンバン来てください！！待ってます！！

第九話（前書き）

更新しました。私は批判メールなんかには負けません！！では第九話
どうぞ！！

第九話

第九話

世界が闇に包まれている…人は死に、大地は汚れてゆく。災厄の元凶だろう黒き異形が、汚れた大地の上に立っている。そして、その異形の眼前に六人の者が居た。そして一際目立つ、一人の男。その男は何も描かれていない、まっ白い面を付けている。その男が刀を抜くと、他の者達が武器を構える。そして……

「ガアアアアアアア！！！！」

ズバアア！！！！

「はっ！」

はやてはバツとを起き上がる。

「…今の夢？…なんや変な夢やったなあ…」

そう言い、時計を見る。

「…まだ四時やないか…もう一眠りしよ…」

もう一度寝転がるはやて。果たして…彼女が観たのは夢だったのだろうか…。

ヴォルケンリッターが現れた翌日のこと…

「みんなの服かわなあかな〜」

と突然言うはやて。昨日の晩、はやてはしっかりと騎士達のサイズを計っていた。

「確かにな・・・何時までもその格好で居る訳にはいかないだろう」

そう言い、シグナム達を見るハクト。シグナム達はあの妙な格好であるため、下手に外に出歩けないのである。

「という事で！今から買いに行くでー！！」

「・・・では行くでしょう」

そうしてデパートに赴いたはやてとハクト。

シグナム達のイメージで服を選ぶはやては楽しそうな様子だ。それになかなかセンスがいい様だ。

「これも似合うなゝあ！これもええなゝ」

「・・・・・・・・」

ハクトは黙って、はやての選んでいる服を見ている。すると彼方此方から視線が集まってくる。それもその筈。此処は女性用の下着売り場だ。女性用の下着売り場に、男の（しかも美形）ハクトが居ると、何かと注目を浴びる。

「（む？視線が感じられる気がするが・・・気のせいだろう・・・）

」

だがハクトは全くそれに気づいていない様子だ。

そして買い物が終わり、帰宅したはやて達。

「ただいま」

「戻ったぞ・・・」

そう言い、二人はリビングに入る。はやては真っ先に、あることに気づいた。ソファアの近くに、青い毛並みをした大きな犬？が居るのに気付いた。はやては目をキラキラさせて

「うわあゝ犬やゝ大きいなあゝ可愛いなあゝこの子どうしたん？」

「ザフィーラです、主」

犬・・・いやザフィーラが急に喋ったので、はやてはびっくりする。

「ど...どないしたんや、ザフィーラその格好は？」

「私は、守護獣です。狼がもう一つの姿...こちらの方が落ち着くので...」

その言葉に、ハクトが

「ほう・・・狼か・・・私の知り合いにも狼の姿になれる者が居たな・・・」

「兄殿のお知り合いに？一体どのような人なのですか？」

ザフィーラがそう問う。騎士達はハクトの事を、シグナムは「兄上」ヴィータは「兄貴」シャルは「お兄さん」ザフィーラは「兄殿」とそれぞれ呼び慕んでいるようだ。

「藍錆の俊狼と呼ばれ、恐れられていた男だ。・・・今も変わらず主に仕えているのだろう・・・」

ハクトは懐かしむように言う。はるか昔、共に黒き獣と戦った男。今もあの牙は衰えを知らないだろう。

「済まない、一人で思い出に浸っていたようだ・・・」

ハクトの謝罪に思わず

「い、いえ、お気になさらず・・・」

そう言うザフィーラ。ハクトとザフィーラがそこうやり取りしているうちに、シグナム達女性陣がはやての買ってきた服を選び終わったようだ。

「・・・私は少し席を外そう」

シグナム達が服を着替える事を察したのか、ハクトとザフィーラは部屋を出る。

「・・・兄上に気を使わせてしまったようだな・・・」

「そうね・・・」

シグナムとシャマルがそう言う。

「大丈夫やて！ハク兄優しいからそんな事にせへんで！」

「そうなのですか？」

シグナムがそう問い、はやては笑顔で答える。

「ハク兄はな～私が悲しんでる時とか、何時も頭撫でて慰めてくれるんやで。あと怖い夢とか見たとき、一緒に寝てくれるし、お風呂も一緒に入ってくれるで！」

はやてが笑顔で言う。だがシグナム達はある事に気づいた。

「あ、主・・・今なんと仰いましたか？」

「え？一緒にねてく」「その後です！」「え」と、一緒にお風呂「それです！」「」

シグナムが少し大きな声で

「主は兄上と一緒に入っているのですか！？」

「そうやけど・・・」

「それは、いくら兄妹とはいえ・・・ダメ・・・じゃないかな？」

シャルがそう言う。するとはやてが

「うゝん今まで一緒に入ってきたんやけど・・・やっぱダメ？」

「ダメです！！」

シグナムとシャルが同時に言う。

「まさか・・・兄貴が一緒に入ろって言い出したのか？」

ヴィータは目を細めて言う。はやては首を横に振り

「私から言っ たんや」

その言葉に一同ホツとする。

そして一段落した後。

「お兄さん、はやてちゃんは私が一緒にお風呂入りますから」

ハクトにそう提案するシャマル。

「ああ、頼む・・・正直心配だったからな・・・」

「え？」

「いや・・・男である私が、何時までも女性であるはやてと一緒に入っていていいものだろうかと思ってな・・・だが、もうそのような心配をする必要はなさだそうだな。シャマル頼むぞ」

「は、はい・・・」

騎士達と思う。ハクトは少しドコが抜けたところがあるんだな・・・と。

ハクトがシグナムに、「私は最後に入る」と言ったのだが、シグナムが「兄上より先に入るなど・・・どうぞお先に」と言ったが、ハ

クトは「女性が先だ」と言ったのでシグナムは渋々了承した。どうやらシグナムはハクトに口では勝てないようだ。結局ハクトが最後に入った。そして一同が風呂に入り終わり、はやてとハクトは晩御飯の支度を始めた。

「主、兄上私に何か手伝えることはないでしょうか？」

「別にええって、座って待ってて」

「無用な心配だ、座って居るがいい」

はやてとハクトにそう言われ、シグナムは席に座る。シグナムは先程からソワソワしており、全く落ち着いてない様子だ。

「さ、みんなできたで！」

ドンツと鍋をテーブルに置くはやて。具は何時もより倍入っている。そしてその鍋の具を、犬用の皿に盛り、床に座っているザフィーラの前に置く。ザフィーラ狼の姿をしている方がいらしい。

「ではいただくか・・・」

「ほな、いただきますー！」

ハクトとはやては、手を合わせて言う。シグナム達も見よう見真似で手を合わせ

「いただきます・・・」

まず先に、ヴィータが鍋の具に箸を付け食べてみる。

「う、うまい・・・」

照れくさそうに言うヴィータ。箸はどんどん進んでいく。

「・・・シグナム達も早く食べよ」

「は、はい」

シグナムとシャルが具を口に運ぶ。

「うまいな・・・」

「ホント、おいしい」

シグナム達は笑顔で言う。

「（ようやく笑顔を見せたか・・・何だ良い笑顔をするではないか・・・）」

心の中でそう呟いたハクト。ハクトは微笑みながらシグナム達の食べている様子を見た。

「おかわり・・・」

ヴィータが遠慮がちにお茶碗を出して言う。

「フッ、よいだろう」

ハクトはヴィータから皿を受け取り、ご飯を盛る。

「む？ヴィータ少し顔を近づける」

「？わかった」

ヴィータがハクトに顔を近づけると、ハクトはヴィータの口元についている米粒をとる。

「全く、だらしないぞ・・・」

そう言い、米粒を口に入れるハクト。

「あ／＼／」

「」「あつ」「」

はやて達は呆けた顔をする。顔を赤らめているヴィータを抜かして。

「どうした？」

「「いえ！なんでもないです！！」」

「そうか、ならいいのだが」

「ハク兄・・・自覚なさすぎや・・・」

と誰にも聞こえない声で呟くはやて。ヴィータは頬を赤らめながら箸を動かし、ザフィーラはもくもくと具を食べていた。

第九話（後書き）

なんというフラグwハクトは無自覚なところがあるんでw感想お待ちますよー！！

第十話（前書き）

久しぶりにこちらを更新しました！

第十話

「はあああ！」

ガキイ！

シグナムが木刀で、ハクトに鋭い攻撃を与える。ハクトは木刀で受け止める。

「ほう・・・中々に良い太刀筋だが・・・」

ガシイ！

「！？」

「油断はいかな・・・！」

ドコオ！

「ぐあああ！」

ハクトに掴まれ、更に拳打をくらい吹き飛ばすシグナム。何故彼等がこんな事をしているかというところ・・・

シグナムが、早朝の剣の稽古をしている時

「早いなシグナム」

不意に呼び掛けられ、振り向くシグナム。

「兄上、おはようございます」

「ああ、おはよう」

互いに朝の挨拶を交わす。

「しかし、朝早くから剣の鍛錬とは・・・感心だな」

「い、いえ・・・やはり体を動かさないと気が済まないので・・・」

「そうなのか・・・」

ハクトは腕組みをする。

「・・・なら、私と鍛錬をするか？」

「兄上とですか？」

シグナムは首を傾げて聞く。

「ああ・・・それとも何か？私では不服か？」

「そんなことはありません！是非お願いします！」

慌てて言うシグナム。

そして今に至るのである。

「立てるか？」

地面に倒れているシグナムに、手を伸ばすハクト。

「ありがとうございます・・・っ！」

シグナムは立ち上がった瞬間躓き、ハクトの胸に、顔をうつめる。

「！？／／す、すいません／／／」

シグナムは顔を赤くし、ハクトから離れる。

「いや・・・私こそ済まない・・・少しやりすぎたようだ」

頭を下げ謝罪するハクト。

「そんな・・・お気になさらずに・・・あの兄上・・・」

「何だ？」

「兄上は何処かの流派を習っているのですか？」

シグナムの質問に、ハクトは

「・・・我流だ」

とだけ答る。

「そうですか・・・我流でそこまでとは・・・」

「そう言うシグナムも流石は騎士、というだけはあるな。見事な太刀筋だった」

「い、いえ・・・そんな・・・／／／」

褒められたことがなかったのか、シグナムは顔を赤くして照れる。

「さて・・・私は先に戻る。シグナムも遅くならぬうちに戻れ」

「わかりました」

ハクトはその場から立ち去った。

「・・・八神ハクト・・・か・・・胸・・・暖かかったな・・・／／／」

シグナムは再び顔を赤くした。

「兄貴！一緒にアイス食おうぜ！」

ソファーに座っているハクトに、ヴィータがアイスを持って駆け寄る。

「フフツ・・・ヴィータは本当にアイスが好きなのだな」

「うん！だってギガうまだもん！」

「けど食べすぎはあかんで。お腹こわして、アイス食べれなくなるよ？」

「うつ・・・食べ過ぎないようにする・・・」

ヴィータはちびちびとアイスを食べる。

「・・・そうだ、ザフィーラ。貴公等は思念通話というものがあるだろう？それは私にも出来るのか？」

ハクトの問いに、狼状態のザフィーラは頷き

「兄殿にも魔力がございますので、すぐにでも覚えられると思います。しかし何故その様なお聞きに？」

「・・・便利だからだ」

「・・・は？」

「思念で遠くからでも会話できる・・・とても素晴らしい事ではないか。私の世界ではそのようなことは出来なかったからな・・・」

ハクトは腕組をして言う。するとシャルマルが

「あの・・・お兄さん？遠くから会話するなら・・・携帯電話がありますよ？」

その言葉に、ハクトは沈黙する。

「・・・いや・・・その・・・なんだ・・・携帯電話は一台持つて歩かなければなるまい？それに比べたら思念通話の方が良い」

ハクトはそう言うと、シャルマル達は苦笑した。ハクトはその様子を見て頭の中で呟いた。

「（この平穩が・・・ずっと続けばいい・・・その為なら・・・私は・・・！）」

そう呟く。

彼が、生まれて初めて手にした平穩。これが崩れるのは、彼にとつて望まぬこと・・・だが・・・

「・・・妹を護る為なら・・・家族を守る為なら・・・私はどんな
『悪』にでもなろう・・・それが・・・私の新たな『道』だ!!」

この平穩は不幸にも・・・崩れ去っていく・・・

第十話（後書き）

次回、A S 戦闘突入です！！お楽しみに！！

コラボ番外編 I K A 編（前書き）

大・復・活　！！どもども！復帰のシロキシュラです！久しぶりにこちらを更新＆コラボの回です！今回コラボするのは、I K Aさんの作品『魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity』とのコラボです！！

コラボ番外編 I K A 編

相良「ふう・・・疲れたあ・・・」

ルチア「お疲れ様」

陸宙管理本部総裁室では総裁と副総裁兼補佐官の二人が仕事を終え、まったりと休んでいた。

相良「・・・何か前にも同じ展開もあった気がするが・・・まあいいか。さて、これからどうするか・・・む！？」

すると突如、アラートが鳴る。

ルチア「どうやら事件みたいね」

相良「はあ・・・休んでる間もなしか・・・行くぞ」

そう言っつて相良とルチアは共に転送魔方陣の場所に向かう。

そして、二人は転移した。

相良「ここは・・・」

ルチア「何なのここ・・・？」

転移した二人は、周りの光景を見て驚く。そこは、ただ真っ黒で、何も無い世界。空おるか、風すら無い。まさに無の世界というのに相応しかった。

相良「風も・・・空も無い・・・」

ルチア「この世界・・・何だか怖い・・・」

相良「ルチア、俺から離れるな」

ルチア「うん・・・」

ルチアは相良の側による。

ギュアアアアアアア！！

相良＆ルチア「!?!」

突然空間が捻れ、世界が揺れる。すると、その捻れから、一つの人影が現れる。

???「・・・・・・・・」

相良とルチアは、その人影の姿がハッキリと見え始めた。白を基調とした鎧、のつぺらぼうのような、何も描かれていない、白い面を付けた男が居た。この漆黒の中で、その者の存在はまるで世界から孤立したような異様さを秘めていた。

相良「お前・・・何者だ」

ハクメン「我が名は・・・『ハクメン』」

相良「ハク・・・メン？」

ルチア「もしかしてあの人が強力な魔力反応の正体？」

するとハクメンは、背中に携えた刀を抜き

ハクメン「私は・・・貴様の存在を否定する！」

相良「なに！？」

翔は、ハクメンの言葉に驚愕する。

ルチア「何で翔を！？」

ルチアがハクメンにそう問うと、ハクメンは刀を翔に向け

ハクメン「その者の存在は世界に歪みをもたらす力を持っている・・・故に・・・存在してはならぬ」

ルチア「そ、そんな！翔が歪みをもたらすなんて・・・！！」

ハクメン「・・・これ以上の会話は無用」

ハクメンは刀を正面に構える。

ハクメン「我は空^{クウ}、我は鋼^{コウ}、我は刃^{ジン}。我は一振りの剣にて、全ての『罪』を刈り取り、『悪』を滅する！我が名はハクメン！押して参る！！」

ハクメンは翔に向かって駆ける。

相良「ルチア下がってろ！こいつの狙いは俺だ！！」

ルチア「！！」

ハクメン「ぜいあ！！」

相良「ロード！モード「刀」！！」

ロード「了解！！」

ガキイン！！

相良はBJを纏い、刀になったロードで、ハクメンの攻撃を防ぐ。

相良「くっ！！・・・なんて重い一撃だ・・・」

ハクメン「斬鉄！！」

ハクメンは、上段に構え、踏み込みながら斬り下ろす。

ギイイン！！

相良「ッ！！」

ブンッ！！

そしてハクメンは足元を大きく薙ぎ払う。相良はそれをかわす。

ハクメン「ほう・・・やるな、歪みの者よ」

相良「まあな・・・（チツ、なんて奴だ！一撃一撃が重過ぎる！こいつ・・・強い！！）」

ルチア「翔！！」

相良「ルチア来るな！」

ハクメン「戦いの最中に、他人の心配か？・・・鬼蹴ッ！！」

ハクメンは姿勢を低くし、一気に翔に詰め寄る。

ガシッ！！

相良「なっ！？」

翔はハクメンに、胸倉を掴まれ

ハクメン「油断はいかな・・・！」

ドゴォ！！

相良「ぐあああ！！」

拳打によって吹き飛ぶ。

ルチア「!?!この!!」

ジャキツ!!

ルチア「!!」

ハクメンは、ルチアの首もとに、刀を向ける。

ハクメン「邪魔をするなら・・・貴様も斬るぞ・・・」

相良「止める!お前の狙いは俺のはずだ!!ルチアは関係ない!!殺すなら俺だけにしろ!!」

ルチア「翔!何を言って「いいだろう」!?!」

ハクメン「私の目的は貴様を滅すること・・・この娘を殺すのは元より目的ではないからな・・・」

ハクメンはそう言い、翔に近づく。

ハクメン「歪みの者よ・・・これで、終わりだ・・・!」

相良「クッ!!」

ルチア「翔ーーーー!!!!」

ハクメンはその刃を振り下ろす。

ガキイン!!

相良「・・・なっ!？」

ハクメン「な、何だと!？」

翔とハクメンは驚愕した。ハクメンの刀を受け止めたのは、ハクメンと全く同じ姿をした者なのだから。

???「ゼエア!」

ハクメン「ちっ!」

ハクメンは距離を取る。

相良「お、お前は・・・?」

???「久しいな、翔よ」

翔はその声と、その気配で気づいた。

相良「ま、まさか!ハクトか!？」

ルチア「ハクト!？」

ハクトはコクリと頷く。

相良「な、なんでハクトが此処に・・・」

ハクト「フツ・・・そんなことより・・・」

ハクトはハクメンを視界に捉える。

ハクメン「貴様！！何故斯様な姿をしている！！何者だ！！」

ハクト「そう荒ぐな『私』よ・・・」

ハクメン「なに・・・？」

ハクト「・・・言葉を交わすのは不要・・・『私』ならわかるだろう？」

ハクメン「・・・ククク、確かにその通りだ！！我が前に立つのなら、如何様な者でも敵だ！！」

ハクト「それでいい・・・翔よ・・・此処は私に任せてもらおう」

相良「ハクト・・・」

ハクトは、斬魔・鳴神オオカミを正眼に構える。

「我は空クウ、我は鋼コウ、我は刃ジン。我は一振りの剣にて、一人の『少女』を護り・・・『悪』を滅する！！我が名は八神ハクト！推して参る！！」

二つの『白』は共に動き出す。

――紅蓮――

ギイン！！

刀の柄がぶつかり合う。

――蓮華――

ドゴオ！！　ゴア！！

下段の蹴り、そして回転蹴りが相打つ。

――斬鉄――

ギイン！！　ガギイン！！

踏み込みつつ、上段切りから下段切りで相殺する。そして二人は跳び

――火蛭――

バキヤアア！！！！

空中で身体を横に倒した後、真上に向かったの回し蹴りを放ち合う。

――椿祈――

ギイン！！

体を横に捻り、1回転させその勢いのまま、刀を上から下に振り下ろす。

ハクメン「ッ!!」

ハクト「ぬう!!」

ハクトとハクメンは、互いに距離をとる。

相良「すごい・・・互角だ・・・」

翔は思わず、驚きの声を上げる。

ハクメン「・・・気に入らん」

ハクト「何？」

ハクメン「確かに、我等の力は互角・・・だが」

ハクメンは、ハクトに刀を向ける。

ハクメン「貴公の剣は・・・聊か『優し過ぎる』・・・」

ハクト「・・・」

ハクメン「何故そのような剣に成り下がった？」

ハクト「世界よりも・・・『護るべき者』を知ったからだ・・・」

ハクメン「世界よりも・・・『護るべき者』・・・だと」

ハクト「今の私には判らぬ……永遠にな」
おまえ

ハクメン「……戯言を、次の一撃で終焉にしよう……!!」

ハクト「フツ……よからう」

両者は、刀を正眼に構え

——虚空陣奥義・夢幻——

その言葉と共に、白い闘気を身に纏う。

ハクト「ッ!!」

ハクトは、ハクメンに向かって駆け抜ける。

ハクメン「向かって来るか!! 面白い!!」

刀を上段に構える。すると

相良「刀身に風が纏っていく……!!?」

ハクメン「虚空陣……」

そのまま振り下ろす。

ハクメン「疾風!!」

ゴオオオオ!!!!

だが

キン！！

ハクト「虚空陣」

ハクメン「なに！？」

ハクトの腕に、円形の魔法陣が展開され、ハクメンの刀がその魔法陣によって遮られる。

ハクト「雪風！！」

ズバアア！！

すれ違いざまに凄まじい一閃をくり出す。

ハクメン「ぬううう！！」

ハクメンは片膝をつく。

ハクト「残念だが・・・今の貴公では私は倒せん！！」

ハクメン「クッ！！・・・ッ！！」

突然、ハクメンの身体がブレ始める。

ハクメン「事象干渉だと！？ぬおおおお！！」

ギュウウウウンン！！

ハクメンはまるで元からそこに居なかったように消え去った。

相良「消えた・・・」

ハクト「む・・・」

ハクトは翔に近づき、手を差し伸べる。

ハクト「立てるか？」

相良「ああ」

ルチア「翔！！」

ガバツ！！

相良「ちょ！？ルチア！？」

ルチアは翔に抱きつく。

ルチア「バカ！！」

相良「はあ！？」

ルチア「心配したんだから・・・」

相良「・・・ごめんな」

翔はルチアの頭を、優しく撫でる。

ハクト「……」

相良&ルチア「あっ／＼／」

二人はハクトの視線に気づき、急いで離れる。

相良「しかし……助かったよ、ハクト」

ハクト「良い……困ったときはお互い様、という言葉があるだろう？」

相良「フフツ、そうだな」

ハクトはスサノヲユニットを解除する。

ハクト「ところで、そちらの世界のはやては元気にしているか？」

相良「ツ……」

翔はハクトの問いに、言葉を詰まらせる。

ハクト「……言ってみろ、翔」

ルチア「翔……」

相良「……わかった、全部話す」

それから翔は、この世界のはやてが居なくなった理由（理由はI K Aさんの小説を読んでください）話した。

ハクト「・・・そうか、はやてが・・・」

相良「すまない・・・」

相良は、ハクトに謝罪の言葉を言う。

ハクト「何故謝る？貴公が謝る必要はない」

相良「ハクト・・・」

ハクト「はやては・・・何かしらの事情があつて、オーディンという男の下へ行つたのだらうな・・・」

ハクトは腕組をしながら、そう言う。

ハクト「・・・翔」

相良「なんだ？」

ハクト「自分が正しいと思つた道を行け。そうすれば、^{おの}自ずと答えが見えてくる」

相良「それはどういう・・・」

ハクト「フツ、出来れば・・・貴公に手助けしてやりたいところだが・・・もう時間のようだ」

ハクトの身体が、先程のハクメンの様にブレ始めた。

相良&ルチア「ハクト!？」

ハクト「次元を切り裂いて来たが・・・流石に、何時までも此処に存在するのは無理のようだな・・・」

相良「じ、次元を切り裂いて来た? な、なんつー出鱈目な・・・」

ハクト「ククク・・・貴公が言えた口か？」

相良「うぐっ！」

図星を突かれて、言葉に困る翔。

ハクト「・・・さらばだ、翔、ルチア。また・・・会えるといいな」

ルチア「そうね」

相良「今度会うときは、前みたいにくっくり会いたいものだな」

ハクト「ああ・・・」

ハクトはそう言い残し、姿を消した。

相良「さて・・・俺達も帰るか」

ルチア「うん！」

翔とルチアは、自分達の世界に転移した。

相良「ふう・・・ようやく休めそうだ」

ルチア「色々あったもんね・・・」

相良「ああ・・・」

翔はハクトに言われた言葉を、思い出す。

「ー自分が正しいと思った道を行け。そうすれば、^{あの}自ずと答えが見えてくる

相良「答え・・・か・・・ハクトめ、最後に意味深な言葉残しやがつて・・・」

翔は何処までも澄みきった、空を見上げる。

相良「また会えるその時までには・・・俺も答えを出そう」

翔は、そう心に決めた。彼に出会うまで・・・答えを出すと・・・。

そして、彼の戦いはまだ続いていく。その戦いに、答えが出るのか・
・誰も知らない。

ハクト「^{ハクメン}貴公も・・・はやてと出会えば・・・変わるかもしれん
かったな・・・」

はやて「ん？何独り言言ってるの？ハク兄？」

ハクト「いや・・・何でもない」

ハクトは、翔に言った言葉を、もう一度頭の中で呟く。

ハクト「（自分が正しいと思った道を行け。そうすれば、^{おの}自ずと答
えが見えてくる・・・か。翔、次に会うときまで、貴公が答えを出
すのを、楽しみにしているぞ）」

ハクトは、天井を見上げてそう思う。

はやて「・・・ハク兄、何か今日変やで？」

ハクト「なっ！？（口　↓↓↓↓）」

はやてのその言葉で、ハクトが一日中orz状態だったのは・・・別の話である。

コラボ番外編 IKA編（後書き）

・・・どうだったでしょうか！？（IKAさん！！）

ハクトVSハクメン！！実質、同キャラ戦w

さあ～～！！復帰した私を止められるものはありませんよ～～！！
全力全快でいきますぜい！！

第十一話（前書き）

久方ぶりの更新です。皆さん、TPPに負けずに二次創作でいきましょ！！

第十一話

「命の……危険？」

「はやてちゃんか？」

幸恵は今日はやての診断に付き添いで来たシグナムとシャルルに悲痛な面持ちで事実を告げる。はやての病状は、命を脅かすくらい悪化しているのだ。

「はやてちゃんの足の病気は、原因不明の神経性麻痺だとお伝えしましたが、ここ半年で麻痺が徐々に上に進んでいるんです。この二か月が特に顕著で……このままでは、内臓機能の麻痺にも発展する可能性があるんです……。このことはハクト君にもどうかお伝えになってください。もしかしたら、入院も視野にいれた治療がいずれ必要になるかもしれませんから……」

「くそっ！なぜ……なぜ気付かなかった！」

診察室を出たとたん、シグナムは拳を病院の壁に叩きつけた。

「ごめん……ごめんなさい……私……」

シャルルが自責の念に囚われて、こぼれおちる涙を止めることができないでいた。

「お前にじゃない！自分に言っている！」

シグナムもまた、自責と後悔の念に囚われていた。そう、本来ならリーダーである自分が気付くべきだったのだ。主はやての病気は病気ではなく闇の書が原因であると。そしてまた、守護騎士の活動を維持するためにほんの僅かであつても主の魔力を必要としていることも無関係ではないということも。

「ねえ、シグナム…お兄さんには何て伝えればいいの？私たちのせいではやてちゃんが死ぬかもしれないなんて知ったら…」

シャルは涙ぐみながら、もう一つの避けることのできない現実を告げた。

ハクトはシグナムたちよりも少し前から主であるはやてと共に過ごしてきた存在だ。彼もまた、シグナム達守護騎士に負けなくらい主はやてを大切に思っているし、シグナム達のこと大切な『家族』だと思ってくれている。『家族』であると見なしている存在が『家族』を壊す。そう考えると、シグナムとシャルは胸が痛む。

「シャル。これについては守護騎士全員で話し合う必要がある。兄上には伝えない方向でいこう」

「…わかったわ、シグナム」

家族に嘘をつかなければならないことに良心は痛む。しかし本当のことを知られるのもまた辛い。二つを天秤にかけた結果、傾いたのは後者だった。

シグナムはヴィータとザフィーラに彼女らの主の現状を告げた。皆悲痛な面持ちで説明を聞いていた。

「助けなきゃ…」

ヴィータがポツリと呟く。三人の視線がヴィータに集まる。

「はやてを助けなきゃ！ シヤマルは治療系の魔法得意なんだろう！？ そんな病氣くらい、治してよ！」

「ごめんなさい…私の力じゃどうにも…」

シヤマルの服をつかみ、泣きじゃくり、問いかける…だが、帰ってきた返事は残酷なものだった。

「…兄殿には事実を伝えたのか？」

ザフィーラの問いに、シグナムは、いいやと首を振る。

「主の病氣の原因は我らにある。責任は我ら自身だけでとらねばなるまい」

詭弁だ。その言葉を発したシグナムでだけでなく、その言葉を聞いた三人もそう感じた。ハクトは無愛想で、あまり笑わず、口数も多くはない。しかし、優しい人間であるということだけは皆知っている。本当のことを知らせても、きっと今までと変わらず受け入れてくれる。そんな男なのだ。しかし…もし受け入れられなかったらどうす

る？もしも拒絶され、事実が主に伝わり、さらに主を失ってしまったら？『もしも』という考えが、ようやく得た平穏と家族を失うのでは、という恐怖に変わる。ハクトのことは心の底から信頼している。信じているのだ。だからこそ拒絶されるのが怖い。

…そんな矛盾した考えにヴォルケンリッターは苦しむ。そして決断した。

「…ならばシグナム」

「わかっている。我らにできることは、そんなに多くはない。だが……」

そう言って待機状態のデバイスを握りしめる。

とあるビルの屋上。そこにあるのは四つの人影。

主の体を蝕んでいる闇の書の呪い

はやてちゃんが闇の書の主として、真の覚醒を得れば

我らが主の病は消える。少なくとも進みは止まる！

はやての未来を血で汚したくないから、人殺しはしない。だけど、それ以外のことだったら、なんだってする！

『目の前に苦しんどる人がおったら、助けてあげてほしいんよ』

人を傷つけることを嫌う、優しい少女であるマスターの言葉が脳裏を横切る。これから自分たちが行うことは、彼女が決して望まないこと。

しかし

「申し訳ございません、我らが主。たった一度だけ貴女との誓いを破ります」

守護騎士達ははやてがイメージした、それぞれの騎士甲冑を身にまとった。

「我らの不義理をお許してください！。我らは貴女を失いたくないのです！」

四色の魔力の光が、四つに分かれて、夜空に散らばった。

カッ カッ カッ…

騎士達が飛び立った場所に一人…

「主が為に…主の命に背く…か」

一人呟くハクト。

「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラよ…お前等のしようとしていることは…己が目的の為に、他人を傷つける…『悪』のすることだ…だがお前等だけに、罪を負わせる訳にはいかぬ…！」

ハクトは空を見上げる。彼もまた、シグナム達と同じ思いだ。人を傷つけることを嫌う、優しい少女『はやてを失いたくない』

「私も…行こう…『悪』^{ハクメン}として！！はやてを…たった一人の『妹』救うために…！」

スサノヲユニットを起動し、夜空に一閃の閃光が走った。

第十一話（後書き）

さあ、ハクトも戦いに身を投じます。これから先どうなるのか・・・
おたのしみに！！

第十二話（前書き）

お久しぶりの投稿です。最近サムイッス・・・手が冷たくてキーボードが叩けません><

第十二話

「ウオオオオオオ!!」

バキィィ!!

「グギヤアアアア!!!!」

ズン!!

赤い鱗を持つ巨大な飛龍が、浅黒い肌の男。ザフィーラの手によって地に倒れる。

「ふう…終わったか…後はシャルを待つだけ…」

「ギヤオオオオオ!!」

「!?!」

先程倒れたはずの飛龍が、咆哮をあげて襲いかかる。

「しまっ…!?!」

その瞬間

ゴアアアア!!!!

「ガアアアアア！！！！！」

一閃の衝撃波が、飛龍の体を走った。

ドォン！！

飛龍は再び、大地に落ちる。

「な、何が……」

ザフィーラは状況がつかめなかったようだ。

「油断はいかな、ザフィーラよ」

「！？」

ザフィーラは。声のする方を向く。そこには、白い鎧に、異様な白い面を付けている者が居た。

「何者だ！！」

ザフィーラは構えながら、考える。何故この者は自分の名前を知っている？もしかしたら、闇の書を狙う輩かもしれない。とザフィーラは考えた。

「待て、そう急くなザフィーラ。私だ」

その者は、鎧を解く。ザフィーラは驚愕する。そこに居たのは、全く想像もしていなかった人物。自分の主の兄で、心優しい男。八神ハクトだ。

「！？そ、そんな、何故兄殿が此処に…！？」

「お前の方こそ何故此処に居る。と言いたところだが、お前の事情は知っている。だが、何故私に言わなかった？」

「そ、それは…」

「…深くは聞かん。お前は、はやての身を案じての行動なのだろう？はやての為にしているのなら、私は問い詰めん」

「兄殿…申し訳ありません…」

「フツ、良い。私にも闇の書の蒐集とやらを手伝わせてもらう。いいな？」

「はい」

「そうだ、シグナム達には、私が蒐集に手を貸すということは、伏せておけ」

「何故ですか？」

「お前になら、同じ男として、信用が出来る。それに、シグナム達に余計な心配はさせたくない。私の事はハクメンと呼べ」

「わかりました」

「…む？」

ハクトはズサノヲユニットを起動した。

「ザフィーラ〜！」

シャルが、ザフィーラの元にやって来た。

（…ザフィーラよ、シャルが居ると聞いていないぞ？）

（申し訳ありません。言うタイミングを逃しました…）

ザフィーラとハクトはそう念話で会話する。シャルは、ハクトを視界に捉えて警戒する。

「ザフィーラ…その人は？」

（話は俺の方であわせます）

（頼んだぞ）

「彼の名はハクメン。安心しろシャル。彼は味方だ。我等の闇の書の蒐集に手を貸してくれるらしい」

「け、けど…」

「大丈夫だ。彼なら信用できる」

「…ザフィーラがそこまで言うなら…」

シャルは少し警戒を薄める。

「よろしく頼むぞ」

「は、はい！」

シャルは急に声を掛けられ、ビクツとする。

「そうだな、シグナム達にも彼の事を伝えなければな」

「そ、そうね…」

シャルは若干乗り気じゃなかったのは、ハクトから見ても判るところである。

第十二話（後書き）

ってなかんじの回でした。次回はシグナム達とハクメンとしてのハクトの回です。お楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9026u/>

魔法少女リリカルなのはA's～悪ヲ滅シ罪ヲ刈リ取ル者～

2011年11月23日18時51分発行